

# 伊能忠敬研究

研究  
究

一〇二二年

第六五号

史料と伊能図



九州沿海図 卷第20伊能忠敬作(重要文化財)

引用元: 東京国立博物館所蔵 Image: TNM Image Archives

九州沿海図は、第七次測量(第一次九州測量)が終了し、第八次測量(第二次九州測量)の開始前に作成した地図である。このとき、西九州と壱岐・対馬、屋久島・種子島などは未測量であったが、それらの地域を除いた大図21図幅、中図1図幅、小図1図幅が作成された。これらの図は幕府に上呈され、浅草文庫に伝わり、東京国立博物館が所蔵している。浅草文庫の朱印がある。現在は、九州国立博物館に長期貸与されているようである。

ここに示した大図は、第20阿蘇の図である。全体に濃色で、特に山系を描く緑が濃い。田畠は、かなり桃色に傾いた色で、国会大図に比べると暗色で、桃色が強い印象を受ける。おそらくこの九州沿海図は、最終版の姿を想定しながら配色などを考えたのである。しかし、だいぶ濃暗色となり、注記が読みにくい部分もあるので、最終版では改良し、国会大図のような明るい色遣いになったのである。

阿蘇山の描き方が秀抜である。鬼嶋山(杵島岳)、高岳、根古岳の注記があり、高岳からは噴煙が立ち上っている。これは、阿蘇谷(阿蘇カルデラの北側)から見た山景である。

鬼嶋山の背後などにはたなびく霞雲が描かれ、大和絵風の描き方も見られる。根古岳は、霞雲に浮かんでいるように見える。

描かれている測線は、熊本と竹田を結ぶ測線で、文化7年の師走に測量した。12月14日に熊本城下を先手、後手に分かれて出立し、大津町に止宿した。大図には、大津町に至る間、上立田村弓削から新町まで杉並木が、新町から入道水村まで松並木が測線に沿って描かれている。これらの地名は、すべて現在も集落名に残っている。大津からの豊後街道は、清正公道と呼ばれ高尾野、新小屋を通り、二重峠に達して阿蘇谷に降りていったが、大図にも両側を山に挟まれた街道を通る測線の状況がよく表現されている。

大津から内牧村に止宿し、夜は天測を行い、翌日宮地村の阿蘇神社の鳥居まで測り、坂梨村まで測量してその日も天測を行った。天測地点まで分岐した測線を確認できる。

星埜由尚 (表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

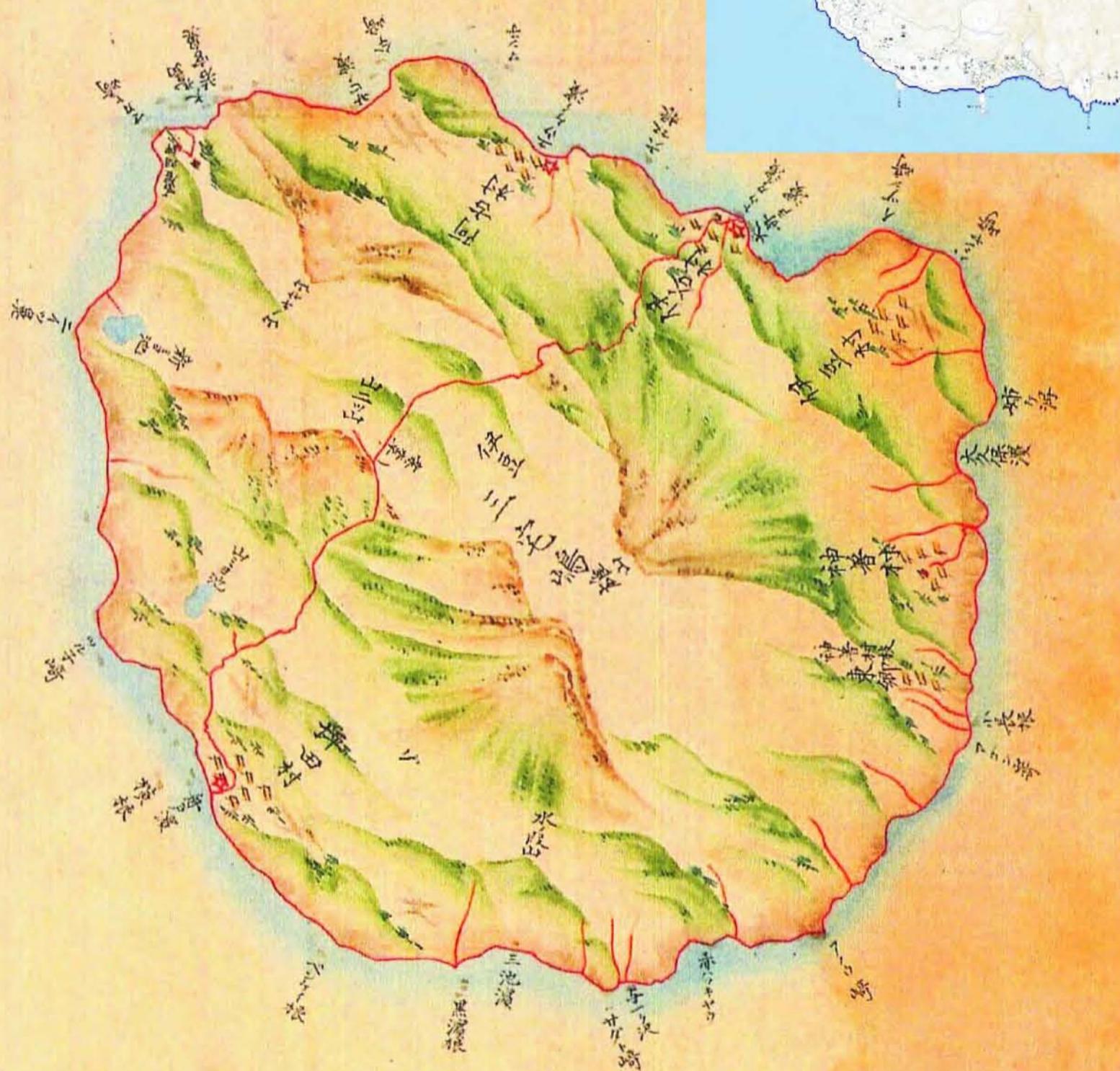


# 伊能図の旅



大図第一〇四号より

## 三宅島



大図を見ると、朱の測線のほか、海岸線に直行する方向に引かれた短い朱線が多数見られることに気がつく。これは河川である。三宅島は火山で火山砂礫など透水性の良い堆積物に覆われているため、普段は枯川が多い。「測量日記」にも「川水無」と記されている。そのことを示すため朱で描いたのである。但し、アメリカ大図では黄褐色に描かれており、国会大図の朱は、やや行き過ぎの感もある。国会大図でも、第81図須坂付近の水無川は、黄褐色に描いている。(星埜)

文化十二～十三年の第九次測量は、伊豆七島を測量し、その後伊豆半島、富士山麓、関東西部を測量するものであった。忠敬は老齢のため参加せず、天文方下役と内弟子により測量作業は行われた。伊豆七島の測量は、まず三宅島に渡り、一部を測量したのち八丈島に渡って測量し、再び三宅島に戻つて測量を完結させるはずであったが、三日三晩漂流し三浦三崎に漂着した。しかし、それにもめげず、三崎から三宅島に渡り測量を完結した。

伊能大図第104号三宅島の部分  
(国会図書館蔵から転載)

右上  
「国土地理院地形図と伊能測線の重ね図」  
(東京カートグラフィック株式会社  
猪原紘太氏作成)

両地図とも右が北

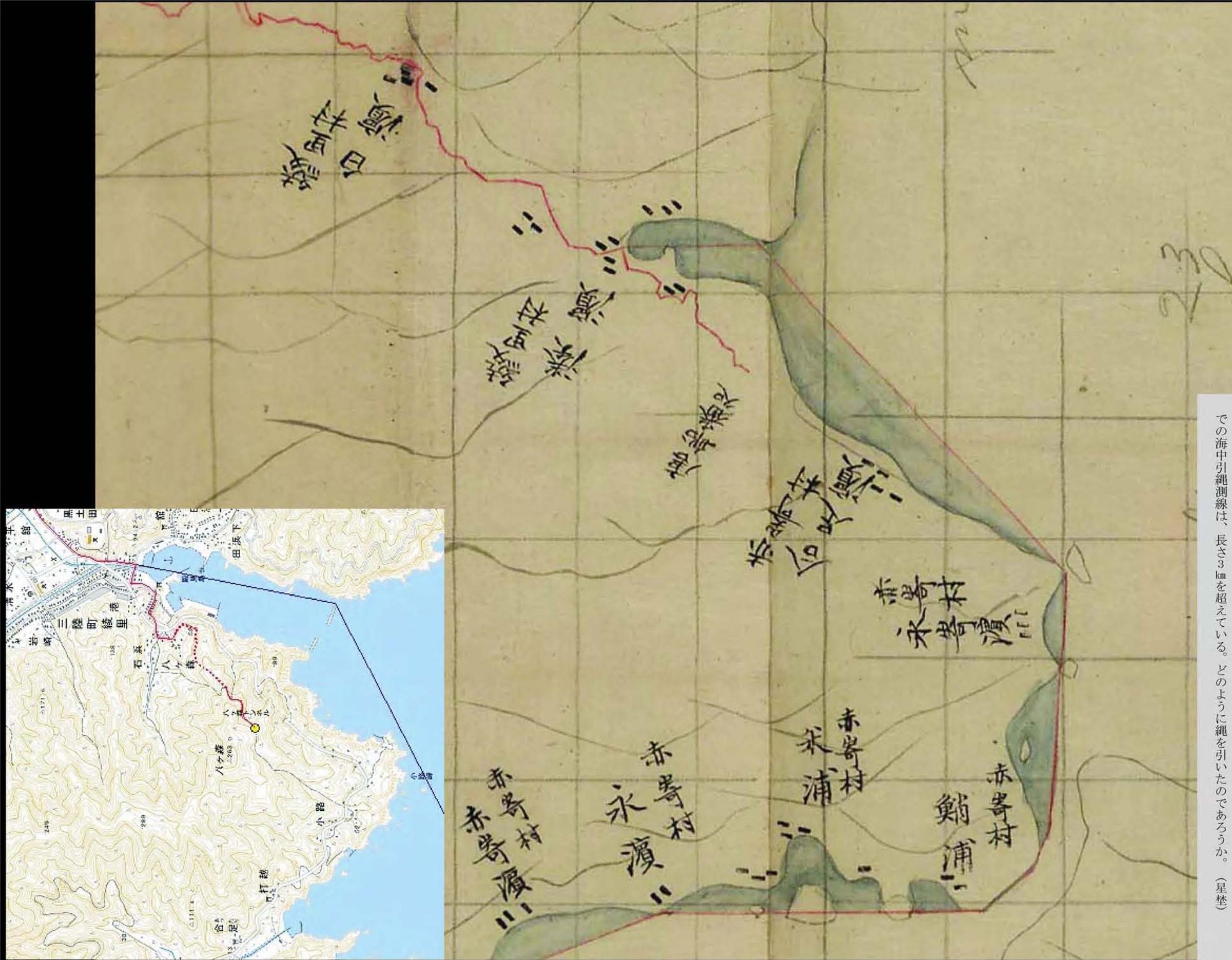
綾里付近

伊能測量の動機は、子午線一度の長さを知ることであつたことはよく知られたところだが、蝦夷地へのロシア艦船の来訪など北邊をめぐる幕府の危機感がひとつの契機であつたことも事実であろう。この図は、そのことを物語つてゐるのではないかと思われる。

「測量日記」には、忠敬と平山郡藏、伊能秀藏が「唐船看所」から所々測つたと記され、大図には「唐船番処」と注記され測線が延びてゐる。

三陸沿岸の測量は、海中引綱によるものが多く、峻険な海蝕崖のため、海岸線の測量ができなかつたところが多い。それにも拘わらず「唐船番処」をわざわざ測量してゐるのは、「唐船番処」を測量する必要があつたからであろう。「唐船番処」は、おそらく伊達藩が設けたものであろうが、その所在地についてはよくわからないが、八ヶ森の中腹にあつたものと思われる。一方、永寄濱からの綾里までの海中引綱測線は、長さ3kmを超えてゐる。どのように綱を引いたのであろうか。（星埜）

(星林



唐船番処（伊能大図第47号綾里付近の部分 アメリカ議会図書館蔵）・『伊能大図総覧』から転載  
左下：「国土地理院地形図と伊能測線の重ね図」（東京カートグラフィック株式会社猪原紘太氏作成）  
(いずれも左が北)

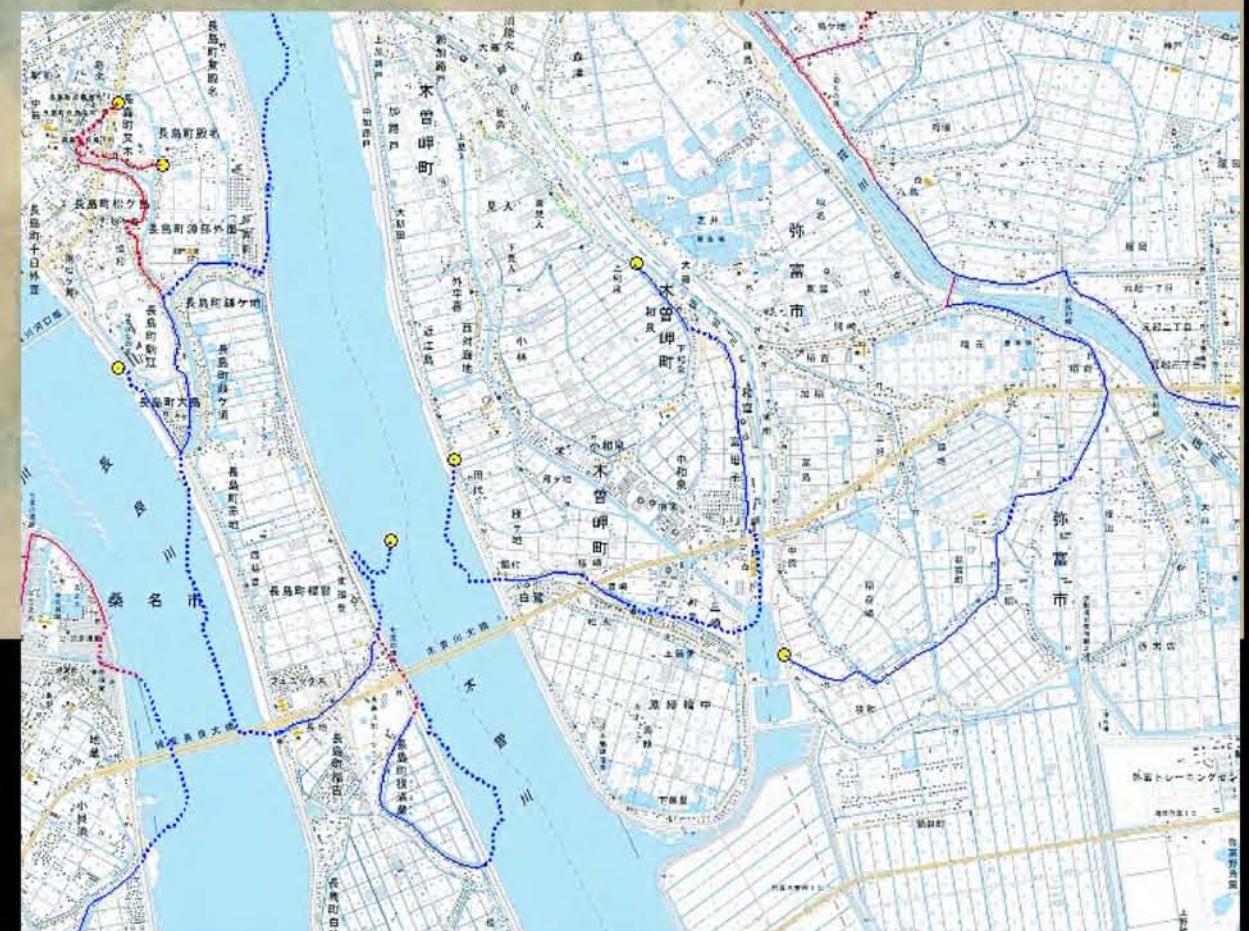
木曾川河口

大図第一二九号より



木曾川河口（伊能大図第129号木曾川河口の部分 アメリカ議会図書館蔵）『伊能大図総覧』から転載）

右下:「国土地理院地形図と伊能測線の重ね図」(東京カートグラフィック株式会社猪原紘太氏作成)



尾張国と伊勢国の国境を流れる木曽三川は、輪中で知られた大河である。大図には、河口の三角州の様子がよく描かれている。三角州の中でも開墾され新田となつた所を測量している。新田の先には、州が多数描かれており、輪郭をぼかし、青い点描が施されている。木曾川の河口には、蘆葦の生い茂つた泥質の未利用地が広がつており、そこには足を入れることができなかつたのである。新田の地名は、地形図を見ると現在もその地名が残つており、それをたよりに現在の地形と比較すると、篠川、鍋田川は、ほぼ現在の河流と同じであるが、加路戸川は木曽川本流に合流しているが、現在は、揖斐川と併流して桑名で揖斐川に合流する。「測量日記」には、川を渡り、川幅を測つたとの記事が見られるが、測線は川で途切れることもあり、行き止まりの測線などからも低湿地での測量の苦労の跡が見える。木曽三川は、日本有数の制御の困難な河川で、伊能図を見ても先人が新田を開発し、治水に苦闘してきたことが偲ばれる。（星埜）

# 伊能図はどう利用されたか

## —その1 江戸時代—

鈴木 純子

### はじめに

完成した伊能図が江戸時代から明治初期にかけてどのように利用されたかについては、日本の地図作成史の上からも重要なテーマであるが、伊能家文書など作成者側の史料とくらべて史料も散在しており、わからぬ部分が多い。

明治期における活発な参考、利用や、幕末期の「官板実測日本地図」、イギリスの測量艦への贈与などが知られているものの、それらは個別に言及されるにとどまり、全体像はなかなかとらえにくい。近年存在が明らかになつたいくつかの写本（二〇〇八年九月例会報告）や、記録などの情報もまじえながら、現在わかっていることをまとめておきたい。明治期に関してはベースの関係もあり、稿をあらためることとする。

### 一 伊能図は幕府の秘図であつたか？

伊能図が幕府の秘図であつたのかという点についてひとことふれておこう。伊能忠敬と伊能図に関する基本文献の一つとしての保柳（一九七四）は、上呈された伊能図の利用について、幕府内部に限定されたとはしながらも、海防や地誌編纂の資料としての伊能図の利用はあつたはずであり、その実証が必要であるとし、むしろ一定の利用の可能性を示唆している。幕府内部における利用に終わっていたことが、「幕府の秘図」という、秘密性のやや強調されたイメージにつながつてゐるようである。シーボルト事件が影響している面もあるだろう。

幕府が伊能図についてことさら機密扱いをしたかどうかについては今のところ確認はできないが、諸侯の依頼にこたえて作られた伊能隊員による写本が残つていることなどからみても（渡辺一九九六・一九九七など）、

そこまでのことはおそらくなかつたのではないかと思われる。商業出版とのかかわりについてすら、忠敬自身の念頭には地図完成後の出版もあつたことを思わせる書状の下書きが残つてゐる（日本経済新聞二〇〇四年）。断片が残るのみで詳しい事情はこれだけではわからないが、出版などもつてのほかという状況ではなかつたようだという推定は可能であろう。進展がなかつたのは最終図完成前の忠敬の死去や、当時の市井の需要には一般的な正確さという点で十分需要にこたえられない部分が多い。

明治期における活発な参考、利用や、幕末期の「官板実測日本地図」、イギリスの測量艦への贈与などが知られているものの、それらは個別に言及されるにとどまり、全体像はなかなかとらえにくい。近年存在が明らかになつたいくつかの写本（二〇〇八年九月例会報告）や、記録などの情報もまじえながら、現在わかっていることをまとめておきたい。明治期に関してはベースの関係もあり、稿をあらためることとする。

### 二 伊能図利用の概要

正確な実測図ではあつても、測量しなかつた部分は描かれていないという特色をもつ伊能図は、そのままの形での商業出版にはなじまなかつたという面もあつたろう。のちの『官板実測日本地図』は別として、江戸期の出版図への伊能（間宮）図の利用の例として知られるのは、安政六年（一八五九）刊の、松浦武四郎『東西蝦夷山川地理取調図』である。

### 三 佐渡奉行所における大図利用

「天保七年正月御沙汰／同八酉年四月落成／御國繪圖御改正御用中日記」「地方附繪圖師／石井静藏／石井彩助」（佐渡市教育委員会蔵 相川郷土博物館）に、幕府による天保期の國繪圖改訂作業にあつた佐渡奉行所の地方附繪圖師石井静藏（夏海）とその息子彩助（文海）の作業経過が記録されている（図1）。ただしこの日記は、のちに修正・増補したもので逸失部分もあるという付記がある。この記録から國繪圖改訂にあつての伊能図利用とその図の由来を知ることができる。

天保六年一二月、幕府勘定所は官庫収藏の國繪圖改訂についての通達を、関係各大名（繪図掛・繪図元）に下す。一国全域が天領の佐渡は在府の佐渡奉行<sup>11)</sup>

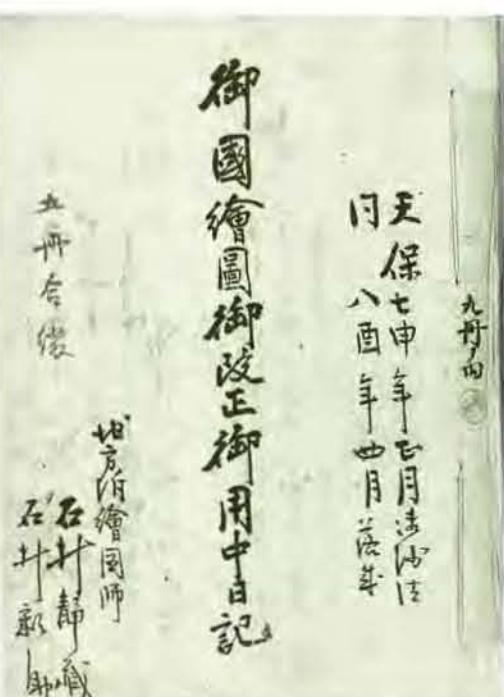


図1 「御國繪圖御改正御用中日記」表紙  
(佐渡市教育委員会所蔵)

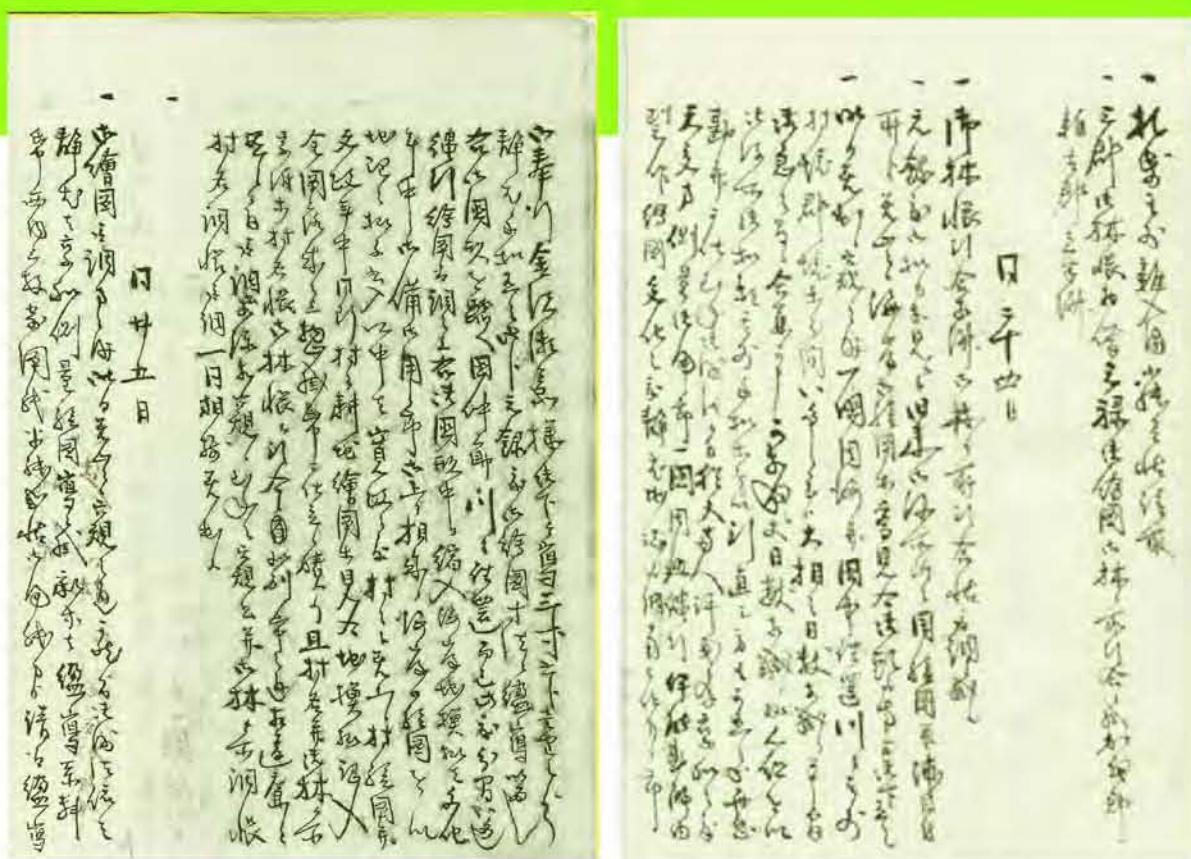


図2 日記本文（引用箇所は右頁・第3丁3行目下部から左頁・第4丁2行目）

若林市左衛門が受けた。天保国絵図はそれまでの国絵図徵収と違い、新たな絵図を作成するのではなく、官庫に収蔵されている前回、すなわち元禄国絵図の写しを各地域の絵図元に下げ渡し、そこで検討した結果、改訂を要する部分があれば懸（掛）紙によつて修正を加えた上で提出、これにもとづき、幕府が雇つた狩野派の絵師が完成図として清絵するという方法で調製された。

天保七年正月、奉行所に国絵図の写しが到着し、石井父子が、改訂事業を拝命する。

石井静蔵（一七二九—一八四八）は江戸で谷文兆、太田南畝などの教えをうけ、また司馬江漢について天文、測量を学んだといい、文化一二年に奉行所の地方附繪圖師となる。彩助は静蔵の長子で、谷文兆、鈴木南嶺に学び、二歳で繪圖師見習となり、國繪図改訂のほか、海防用の海岸繪図作成などにもあたつてゐる（相川郷土博物館 一九八〇）。國繪図編纂作業がテーマではないので詳細は省くが、上記の日記によると、幕府下げ渡しの元禄繪図を検討した兩人は、国仲平野部分、海岸、道筋などいずれも異同が大きいため部分的な修正では不十分で、全面的な再測量と惣掛紙による修正が必要であると判断した。しかし、提出期限の問題もあって全土の再測量は断念し、海岸線については石井夏海所持の「伊能図」を用い、国仲筋、川々、往還に限つて分間繩引をおこない、海岸、村、耕地などの地模様はその他の資料を利用して仕上げることとした。この方式について述べる天保七年正月二四日の日記は「伊能図」（大図）の利用について、

業は下げ渡された元禄図の作業用複製図と、伊能図の拡大写本作り（盈寫、元禄御絵図寸法五寸六分七厘二毛余壹里（1:22,580）と同寸に<sup>2)</sup>）から開始された。兩人が分担して進めていた。日記のなかでこの伊能図については引用箇所の「伊能勘解由製作絵図」のほか「享和側量図」「享和度天文方測量御絵図」「天文方御調絵図」「天文方ニ而御調之分」などの表現が使われている。

海岸線については伊能図のほか文化年間に御備御用のために浦目付所が差し出した海岸御絵図も校合、雪解けを待つて測量した国仲筋、羽茂郡<sup>むもぐん</sup>の新しい繩引分間図のほか、奉行所備付の御林帳などを使い、翌八年四月に惣掛紙図正・副が完成し、奉行のもとに納められた。

ところで、静蔵によるこの佐渡大図の写しは現存している。佐渡金山跡を管理するゴールデン佐渡株式会社所蔵の「佐渡国三寸六分壹里之図」（図3）で、二〇〇六年に筆者が同島を訪れた際に機会を得て着目したゴールデン佐渡永松社長（当時）のご厚意により、伊能忠敬東京において当研究会（渡辺一郎など）と、伊能忠敬記念館学芸員紺野一幸氏で確認した（毎日新聞二〇〇六・前田二〇〇七）。

「：享和之度／天文方側量御用之節一國周廻繩引伊能勘解由／製作繪圖文化之度静藏地誌取調御用被仰付候節／御奉行金沢瀬兵衛様御下ヶ寫三寸六分壹里之分／静藏手扣在之此分元祿度御繪圖寸法ニ盈〔原文は糸偏付いすれも拡大の意〕寫いたし：」（／は改行・国は異体字）と記す（図2）。

佐渡島は大図一枚（一二・七×一六七・五cm）にそつくりおさめられており、余白（海）に「安瀬堂藏書記」という印記がある。安瀬堂は上記の石井静藏

「文化之度地誌取調御用」というのは、奉行所地役人の田中美清などによる『佐渡志』の編纂で、静蔵が付図の作成にあたつたと思われる。その資料と当時の奉行金沢瀬兵衛が提供した大図写本（三寸六分毫里）を静蔵が手控として写して保持していたものだとしておき、国絵図改訂の方法をめぐつての奉行所とのやりとりのなかで、自らその図の利用を提案しているところからすれば、ひそかに写したのではないことがみてとれる。

作業開始が測量にはむかない冬期でもあり、改訂作

利用の好条件であり、島がちょうど大図一枚におさまる大きさだったことも便宜であったにちがいない。実際、何枚もの大図を組み合わせなければ地域全体

をカバーできないとすれば、各地方における利用は現実的でない。しかし、最終上呈図でないとはいっても、時代に伊能勘解由の測量図、天文方の測量御用による

地図という認識のもとに伊能図が使われたことが記録に残っていることは興味深い事実である。伊能測量の地方での認知度を示すひとつの例ともいえよう。

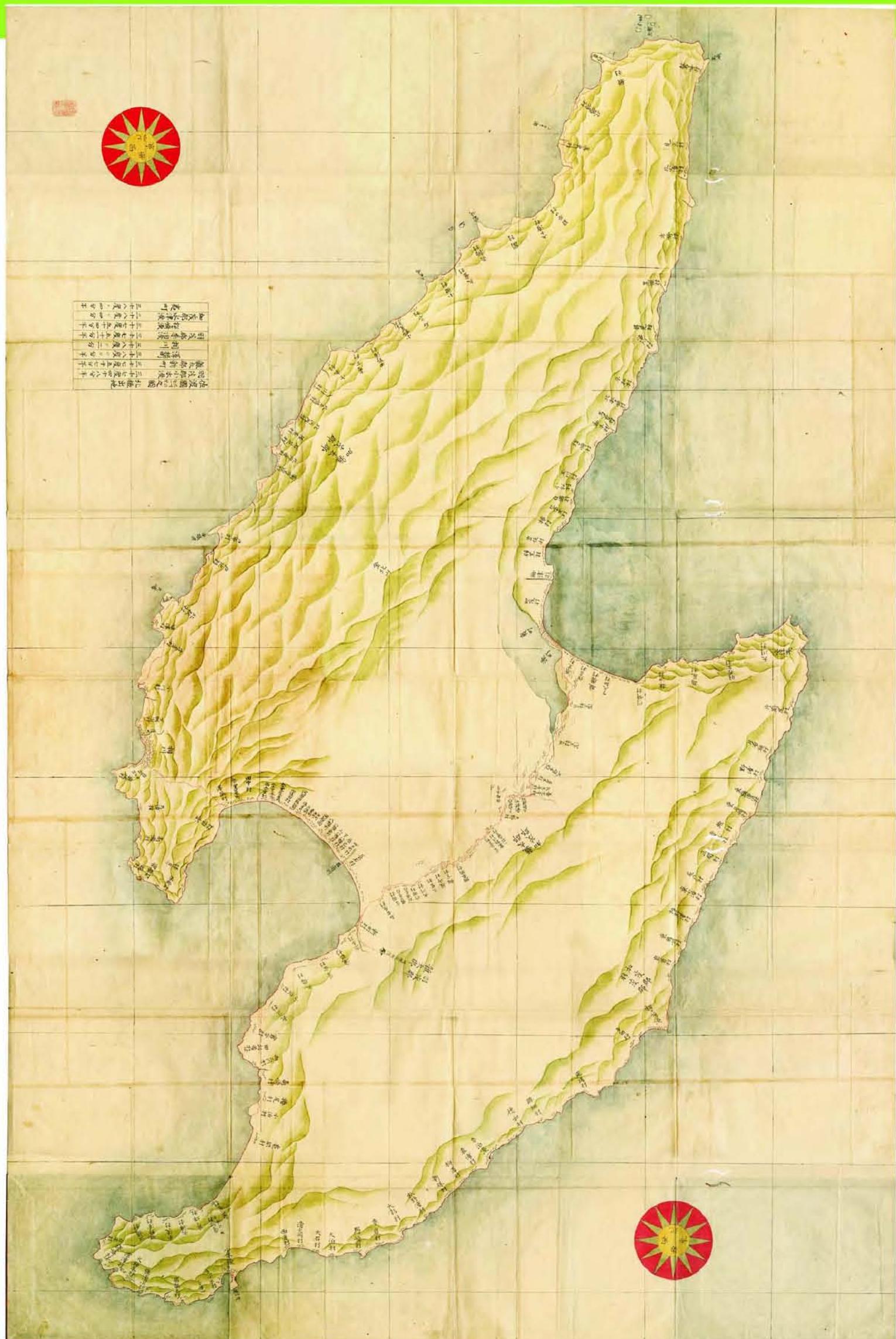


図3 「佐渡国三寸六分壹里之図」（ゴールデン佐渡株式会社所蔵、画像は同社提供）

#### 四 江戸湾海防と伊能図



図4 海岸要地之図表紙

早稲田大学図書館所蔵の「海岸要地之図」武藏相模安房 上総下総（甲・乙二鋪）は江戸湾沿岸を描く大図の集成写本である（図4-6）。この図の存在は藤原（二〇〇七）によつて報告された。早稲田大学図書館においては、第二次測量後の中図、文化元年上呈の沿海地図小図の所蔵が知られていたが、本図についてはそれまで知られていなかつた。目録カードには伊能図の写本であると注記されていたが、標題が伊能図のものとは異質なため看過されてきた。データベース構築のための点検により所在が明らかになつたものという。

藤原報告（前掲、以下報告とする）によれば、本図は二鋪からなり、それぞれ折りたたんだ状態の上下に厚手の渋引の表紙を付し、その中央に「武藏相模・安房・上総下総 海岸要地之図 甲（乙）石川控」（中黒部分で三行で墨書き）と墨書きした題簽を貼付、甲・乙二鋪がまとめて一つの帙に収められている。報告には図の特色として ①鋭角的な朱の測線の上に、道路・海岸線をあらためて墨、彩色で描く ②針穴本（ただし裏打ちのため不鮮明） ③二枚続きだがコンパスローブはない ④描画は沿岸部のみ ⑤地名には大図と異同あり ⑥方位線がある ⑦江戸湾防備・海上交通関係情報が豊富という七項目があげられている。また、江戸周辺の描画内容などから原

筆者らも一度この図を閲覧する機会を得てゐるもの、詳細な検討まではできていないが、それぞれの特色について簡単にふれておこう。①の測線および海岸線については伊能図の表現にならつており、墨、彩色であらためて描かれていたとされる海岸は測線が内陸を通る部分や崖の部分などで、海岸線を通る測線は測線そのものが海岸線を表している。沿岸部に限られる描画もこの地域では文化元年図の特色である。地図の基盤である測線が伊能図のものでは明らかであり、景観表現なども伊能図の様式を保つてゐるが、原図をそつくり写しとることを第一の目的としたものではないようだ。⑤以下の特色は図の作成目的と結びついたものである。方位線についてはこの図にみられる朱の直線は伊能図本来の方位線ではなく、要地間の距離を表示するための見通し線で、方位の表示はなく距離だけが記されている。砲台、陣屋、湾内の水深記入など江戸湾防備の基本情報は本図の大きな特色であり、報告ではそれらをリスト化した上で、海防関連施設の配置は嘉永元年（一八四八）末ごろのものであるとし、伊能図がこれらの事実を投影させるための実用的な地図として使われているという点を指摘する。

寛政年間ごろにはじまる外国艦船に対する江戸湾の防備策は時期を追つて変化する。弘化二年（一八四五）には、海防掛が設置され、防備体制は嘉永直前の弘化四年に、川越（相模側）、忍（房総側）の二藩による分担から、相模には彦根藩、房総には会津藩を加えた四藩体制へと強化された。幕府の海防政策にとつて、この種の図の必要性がとりわけ高まつた時期といえる。

図は文化元年上呈大図であろうとしている。

二枚続の甲は江戸湾奥、乙は三浦半島、房総半島

南部をおさめ、甲は縦図、乙は横図でL字型に接続する。二分割の図であるが大図の図割とは異なる。これはコンパスローブの不在ともつながるだろう。地図は北が上でなくほぼ北東を上にしており、上端中央部は船橋辺にあたる。方位表示としてコンパスローブが役立つたはずであるが。

筆者らも一度この図を閲覧する機会を得てゐるもの、詳細な検討まではできていないが、それぞれの特

この時期の幕府海防関係のイベントに、嘉永三年（一八五〇）、勘定奉行石河政平（土佐守 海防掛）、

目付本多隼之助・戸川中務小輔、鉄砲方井上左太夫・

田付主計による巡察「近海御備向見分」がある（勝海

舟一八八九）。巡察役にはさらに西丸御留守居筒井

紀伊守、御留守居番次席吟味役御勘定吟味役佐々木循

輔が追加された。各巡察役が配下を引き連れる大規模

なものである。海岸の形勢、水路の浅深等に応じ、ま

た砲撃の効果も勘案して砲台、屯所などの適正配備を

するための調査が目的であつた。本図の特色のひとつ

である海の浅深もかかわつてゐる。見分の進め方につ

いて鉄砲方の井上左太夫・田付主計が提起した協議事

項とそれに対する回答（下げ札）に、絵図にかかわる

部分がある。浅深測量の技術者や船、水主などの準備

要請に対し、下げ札は「近海浅深の義は、先達て分間絵

図面へ書き加へ、伊勢守殿へ差し上げ置き候間」とし、全

域ではなく、新たな台場建設が必要なところのみ測量

するようなどと、右分間絵図面御有合わせの品御渡

しこれありたく御写し取り、返却のつもり」に対しても「分

間絵図面、勘定所扣の分、差し遣わし申すべく候」、

そして絵図引きのできるものを召し連れたいと、右分間絵図面に引合わせなどと、現場での地図利用もうか

起には吟味方下役、普請役のなかで間にあわせるよう

にという。巡回の報告書中には「すべて海岸出崎々、ま

たは高台の様子、海底の浅深、その場所場所にていちいち分

がえ、各備場の詳しい所見を記した上で、「これにより

実測地図写、浦賀奉行差し越し候書付、絵図、誠丸家來

差し出し候書付、絵図、富津洲先の絵図、ならびに大砲そ

のほか打方見分業書ども相添へ、この段申し上げ候。以上。  
ノ成八月」と結ぶ。

「分間絵図」「実測地図写」などとしている地図は伊能図で、本図とかかわるものであろう。また、水深測量の例として富津洲先の記録もあるが、砂洲の名称は本図のものと一致する。藤原「報告」でも指摘される地名の異同部分の一例といえる糀谷と羽田の間の鈴木新田は「大森町打場」取建てとの関係で巡察対象になつ

ているなどの点からみても、本図が前記の復命書にそ  
えられた「実測地図写」の写しである可能性は高い。

なお、石河土佐守の配下に御普請役見習石川忠之助  
という名がある。表紙の石川控という記載とつながる  
かどうか確認できないが、存在だけ指摘しておく。

最近、国立国会図書館にもこの図と同じ範囲を描く  
『寛政度江戸近海測量全図』が所蔵されていることが  
わかった。題簽に「寛政度／江戸近海測量図／雅樂堂  
藏」とある。早稲田の図が二枚組であるのに対し、こ  
の図は二枚を接着したL字型となっている。北東を上  
とし、相模は鵠沼、上総は花園村（早稲田図は江見村）  
辺までと、収録範囲もほぼ同じ、朱の測線、山地、村  
落などの表現も同様で、伊能図では鳥瞰図風に描かれ

た猿島に平面図の懸紙を  
する点も共通するが、砲  
台などの記入は猿島の大  
筒御備場、池臺・竹ヶ岡  
砲台、鶴崎の常夜灯、城  
が島の篝堂などごくわず  
かで、水深や見通し線の  
記入も全くなく、村名の  
村が省かれ、小判型の枠  
内に書かれているといつ  
た変形はあるものの、ほ  
ぼ伊能図どおりの写しで  
あるが、地名については、

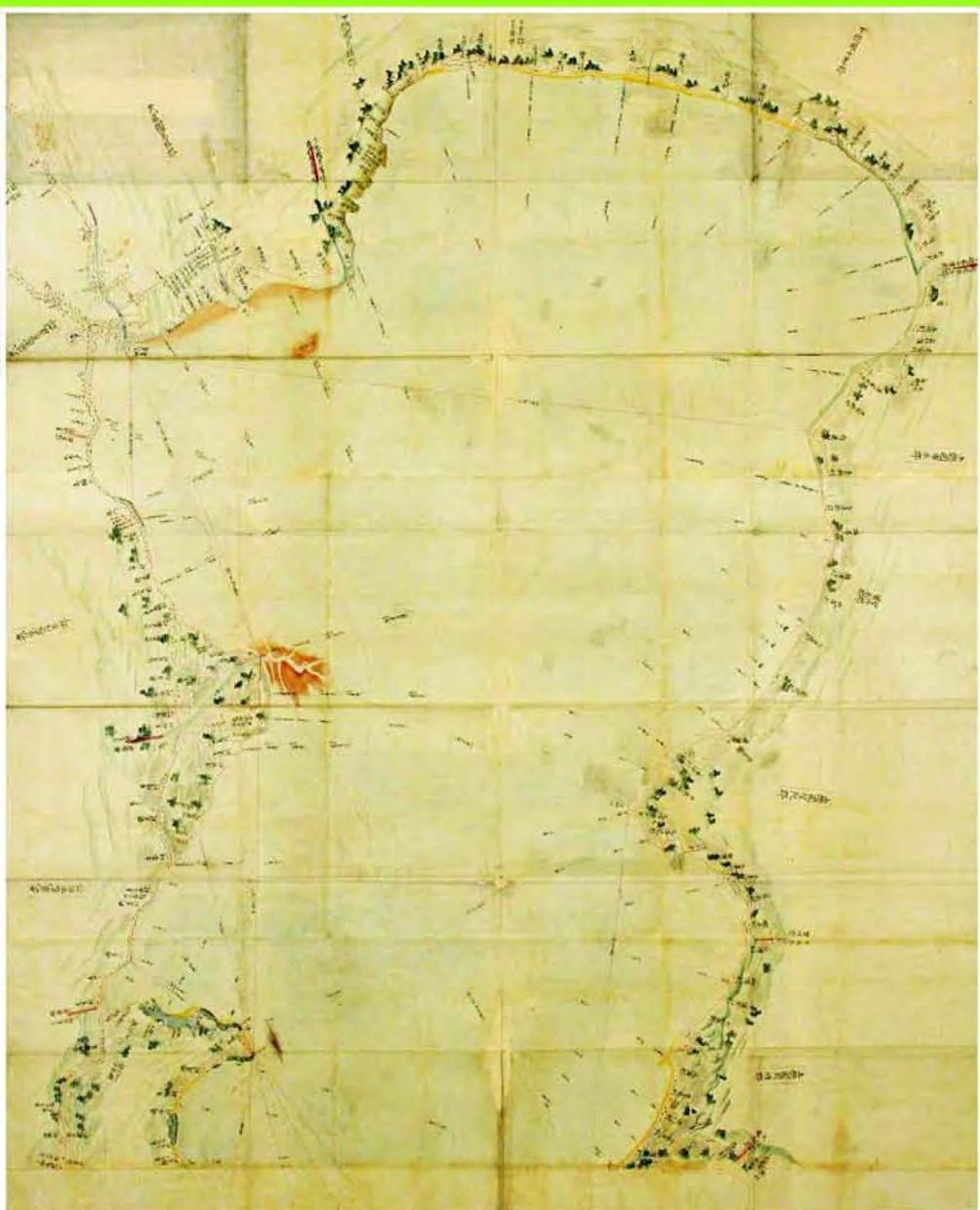
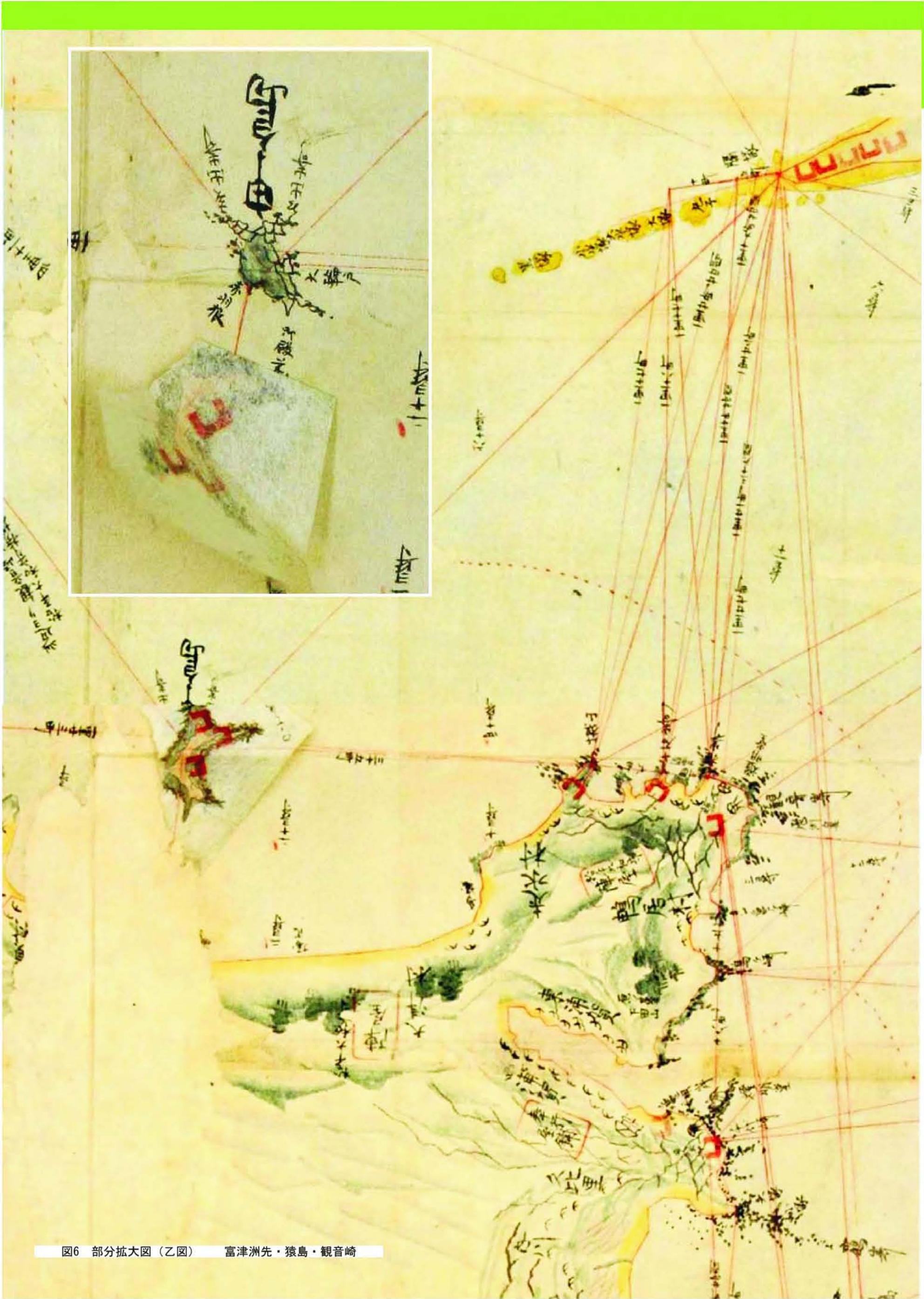


図5 海岸要地之図 甲（上）・乙（下）（早稲田大学図書館所蔵）



伊能図にはない旗山・十石崎・觀音崎や、房総半島南端部州崎の岬の南岸、伊戸村、相濱村間の村名増補など、早稲田図とほぼ共通している。両図は共通する原図によるものと思われる。しかし、この図も明治三三年の購入資料で、作成の経緯につながる由緒は知られない。早稲田図には江戸市内に深川黒江町・曆局・浅草御門などの記載があるが、国会図にはない。旧藏者雅楽堂は杉浦丘園か。杉浦丘園（三郎兵衛）一八七六年（一九五八）は京都の大呉服商大黒屋第一六代、好古・藏書家として知られる。

以上二図のほか、藤原（前掲）が言及する「豆相武房総沿海図」（筑波大学図書館所蔵）、「武相豆房総海傍之図」（文政二年、鷹見泉石写、明治大学図書館所蔵）の二図は大きさ、構図のほぼ共通する沿海地図中図の編集写本で、前者には後者にない台場の記載があるといい、既存の台場に加えて、弘化四年（一八四七）設置の相模国千駄崎、安房国大房崎台場が新設予定として記されているという。内容としては前記二図にやや先行する図ということになる。後者は測線や伊能図起源の方位線など伊能図の特色をもつが、房総半島内陸部の河川、村などが補記されている編集図である。海上の距離、航海上の注記、番所など湾内の記載事項が多い。いずれも海防とのかかわりを示している。鷹見泉石の写本には「文政二巳卯年春寫鷹見泉石」との識語があり、早い時期の写しである。

ここでみた図は、伊能図そのものを写し伝えることを目的としたというより、海防という時代の要請のなかで、主題の位置情報の確認や可視化のための基図として伊能図が利用されているという、すぐれて近代的な基本図利用の形態を想起させるケースとして注目される事例である。

## 五 開国期の小図写本

開国から明治維新に向かうこの時期には最終上呈小図の動きが目立つ。前の二件、佐渡、江戸湾での利用

がいずれも文化元年上呈の沿海地図であったと対照的である。

安政二年（一八五五）、長崎に開設された海軍伝習所には、江戸から取りよせた小図があったという。佐野常民の東京地学協会における講演「伊能忠敬翁事蹟」（明治一五年九月）に、次のようなくだりがある。よく知られた部分ではあるが、保柳（前掲）から引用する。

「……これより翁の測量図につき、余の實際感触したるところと、その功勞の死後にあらわれしものとを述ぶべし。翁が測量図の大成は、前述のごとく六十年前なるも、幕府に上呈したる原図は、東京紅葉山の書庫に、その副図は勘定所に秘蔵して、かつて江湖に伝わらず。いまを距る約三十年前、オランダの軍艦崎陽に来航したるときにあたり、はじめて海軍伝習の挙ありて、永井尚志そのことを督し、勝鱗太郎、矢田堀景蔵等來学せり。當時、永井の請求によりて、わざかにその小図の写本を東京より送り来たり。時に余が旧藩鍋島家も、また航海術の必須なるを知り、藩士をしてこれを学ばしむ。余、このことに関わるをもつて永井等と往来し、偶々その図を一見するを得たり。因つて百方懇請してこれを借り、同藩の図手六、七名をして、日夜これを謄写せしめたり。爾後、余、藩命を承て海を航するにあたり、該図によつて近海の航路を定るに、島嶼の形状、岩礁の位置等を掲出すること、確実精詳にして、常にその力に頼り、暗夜燈火を得たるの思いあり。深く翁が図の精なることに敬服し、その功の大なるに驚嘆せり。のち幕府これを刊行して世に公にするに及んで、内国の航海者、広くその恵みを被るにいたれり……」

佐野常民は旧佐賀藩士で、藩の近代技術育成にあたり、海軍伝習にも参加、維新後、大蔵卿、元老院議長など歴任、永井尚志は幕臣、海防掛などをへて、海軍伝習所では総監をつとめた。後年の口述ではあるが、江戸時代における伊能図利用の例であり、幕臣のひとりとしての永井が伊能図の存在と価値を十分に認識していたことともに、正本、副本のほかに小図の写本が

作られていた（または伝習所用に作られた?）こと、佐野の尽力により佐賀藩でもその写しを作つたことなど、重要な情報を含んでいる。

万延元年（一八六〇）には、蕃書調所（のち文久三年開成所と改称）出役絵図引が軍艦奉行の要請による「御国測量図」の写しを作成、ついで文久元年（一八六一）には、外国掛目付の要請による同図の写しを作成した（倉沢一九八三）。

「開成所事務一」<sup>3)</sup>中に、外国掛目付から老中あての文久元年二月付の申出、

「御国測量図写取方之儀二付、昨年十二月廿六日申上候趣ハ、御国周海御警衛、又ハ、水陸遠近程等取調候二ハ、測量図手許ニ差置不レ申候てハ時々差支有レ之候間御入用ハ、御軍艦奉行取計い候振合を以、右絵図為二写取候様仕度段、申上置候儀之処、御軍艦奉行ハ、蕃書調所出役絵図引江為二写取一候、同様にこちらの分二付、右振合を以為二写取一、私共江相廻し候様、古賀謹一郎江被ニ仰渡一被レ下度奉レ存候、依此段申上候、以上二月、外国掛御目付」

蕃書調所絵図引（のち画学局）は天文方訳官を務める。『御国測量図』とは伊能図のことである。図の種別については明示されていないが、同じ時期に始まつた官板実測日本図（小図）出版に関する文書にも伊能忠敬沿海実測図、伊能勘解由実測図などとあるなどの文脈から小図とみてよいだろう。

蕃書調所絵図引（のち画学局）は天文方訳官を務めていた柴田（新発田）収蔵が安政三年（一八五六）絵図調査出役となり、同四年には川上万之丞（寛、冬崖）、同五年前田又五郎が加わっている。柴田は世界地理の知識と地図作成の技能を評価されて天文方に任用され、山路彰常の『重訂万国全図』（高橋景保「新訂万国全図」改訂版）編さんにも参画した。川上には伊能図もとづく「大日本地図」（明治四年）、前田には「亞西亞略圖全」（幕府陸軍所、慶應三年）といった地図作品が知られる。柴田の病死（安政六年）後には、宮崎（の

ち宮本）元道（文久年間の小笠原調査に参加、「小笠原島真景図」）、さらに島霞谷などが加わった。

現存が確認されている文政四年小図の写本はつぎのとおりである。

① 東京国立博物館所蔵の三枚セット

高橋景保が昌平坂学問所に献納

② 英国海事博物館所蔵の三枚セット

文久元年英國海軍測量艦長の要請（駐日公使

オールコック経由）により幕府から進呈

③ 東京都立中央図書館所蔵の「本州東部」「西南日本」

大概如電旧蔵で裏面に「此者阿部勢州公執政時天文台に命じ写せしものの由、大槻先生より承り候併記し置くもの也」との記載

④ 神戸市立博物館所蔵の「蝦夷」「西南日本」

⑤ 阿部正道氏所蔵の「蝦夷」

阿部家が蝦夷地経営に責任をもつた時期の作成、

明治になって返還された（所蔵者談）

一方、小図写本の存在をうかがわせる記録としては、前掲の長崎および佐賀の二セットと、万延元年、文久元年に軍艦奉行、外国奉行が蕃書調査所出役絵図引に作成させた各一セット、都合四セットが知られる。

現存する小図の写本はいずれも精細で、幕府関係機関で作成された可能性が高い。しかし、①が伊能グ

ループ（であろう）、③が天文方作成と伝えられるほかは、成立の経緯は不明で、右の記録と現存図がどうつながるかはわかつていよい。筆者なりに考えをめぐ

らせてはいるが、発表できるレベルには達していない。

英國海軍測量艦への写本進呈への顛末については広く知られているのでここでは省略するが、当該写本の来歴についてはなお追究の余地があると考えている。対外関係を軸として激動する開国期、諸外国対日本という意識から国土の正しい認識、正しい地図、「実測図」への要求が高まり、コンパクトな小図が相次いで写されたことが特筆される。

文久元年八月一日には、オランダの総領事デ・ウイットからも幕府に対し、航海用としての伊能忠敬沿海実測図

附与が要請されている。（「維新史料綱要データベース」<sup>4)</sup> 次章参照）

## 六 『官板実測日本地図』の刊行

『官板実測日本地図』は伊能小図をもとに、一部他の地図による増補を加えて、幕府開成所が編纂、刊行した木版刷の日本全図で、「畿内 東海 東山 北陸」「山陰 山陽 南海 西海」「蝦夷」および「北蝦夷」の四図からなる。刊記がないため刊年はあきらかでないが、慶応元年と推定されている（福井一九八五・高木二〇〇一・二〇〇二）。初版については書肆には出さず、開成所に願い出たものに払い下げるという方式がとられた。編纂過程における、北蝦夷（サハリン島）国境の取扱、伊能図に含まれない無人島（小笠原）、琉球などの増補をめぐる開成所頭取古賀謹一郎と幕閣のやり取りや、再版以降を含む書誌的変遷などについては本誌連載の高木（前掲）、また、同氏の近著『近世日本の北方図研究』に詳細に報告されているのでご参照願いたい。

前章をデ・ウイットの要請で終わつたが、維新史料綱要是この件につき次のように記す。

「文久元年八月十一日蘭國總領事デ・ウイット、幕府に対し、航海用として伊能忠敬沿海実測図附与を請ふ。尋で「十七日」幕府翻刻してこれを贈るべきを答ふ。」

ここからさらに「維新史料稿本」<sup>5)</sup>の記事（原本「続通信全覽」）にあたると、ウイットは英國海軍への地図（伊能図）贈与を引き合いにだして、自國にも必要であると贈与をもとめている。これに対する八月一七日の老中久世大和守・安藤対馬守の返書は、要求に理解を示しつつ、我が沿海測量図はイギリスに渡したもののか余部がなく、速やかに写すこともできかねるので、「航海便利の為め彫刻いたし候様此程其筋に命したれば右成功次第差贈り可申と存候」という。そして

「此程中、陸軍所、御軍艦操練所御目付方等江、追々御行配布がおこなわれたようである。こうした事情のもとで、「先般仰付」られた「実地緊要」の「精詳明了」な実測地図官板を急ぐべきだという林大学守らの伺書に応えて、年末に至つてようやく、分界、領分等は入れば右成功次第差贈り可申と存候」という。そして八月だけで日付はないが、この返書と連動する「和蘭コンシルゼ子ラールより沿海實測圖御貸渡相願候儀に付申上候書付」が開板の必要を上申する。長くなるが

伊能図をめぐる当時の雰囲気をうかがわせる史料として引用する。

オランダ総領事からの伊能勘解由著述の沿海實測圖要求について、先に英國軍艦に渡した振合もあって応えざるを得ないが、「一体右圖は精細緻密にて外國人共信用仕候より追々、御渡方之儀等相願候儀に可有之候間御国内おろても練練所は勿論諸国商船等近海渡航仕候もの共まで針路之遠近暗礁之有無等巨細相分り候へは難陥覆没之憂も無之運轉輸送之便を得候儀に有之將前段之通以後外國々より英蘭同様願出候節御渡し方御都合にも相成可申に付此程御目付より申上候趣も有之候間早々御開版相成候様仕度依之御返簡案別紙の通り取調私共一同評議仕此段申上候以上酉八月外国立会役々 外國奉行」

そして、この年（文久元年・一八六一）の九月には、大久保伊勢守、古賀謹一郎、妻木田宮が、実測図官板について老中あて、「実測図官板被ニ仰付一板下絵図追々々写方仕罷在候處、右絵図面ニハ蝦夷北地の分四十度ヲ限り」という伺いを発している。幕府が官板刊行をきめた時期は不明だが、右のオランダの要請がスプリングボードの役割をはたしたことは確かである。機は熟していたというべきか、一か月後には作業が開始されているという即決ぶりである。

しかし、第一～三鋪の彫刻は完成したものの、樺太の扱いが決まらないために元治元年（一八六四）九月にいたつても全体の完成に至らず、軍事・航海方面で特に強かつた「この正確、精密な近代的日本地図を利⽤したい」という状況下で、第一～三鋪については行配布がおこなわれたようである。こうした事情のもとで、「先般仰付」られた「実地緊要」の「精詳明了」な実測地図官板を急ぐべきだという林大学守らの伺書に応えて、年末に至つてようやく、分界、領分等は入れば右成功次第差贈り可申と存候」という。そして八月だけで日付はないが、この返書と連動する「和蘭コンシルゼ子ラールより沿海實測圖御貸渡相願候儀に付申上候書付」が開板の必要を上申する。長くなるが

たものに払い下げるという決定が下されるという糾余曲折があつた（福井一九八五）。

よく知られているように、『官板実測日本地図』は慶応三年（一八六七）のパリ万国博覧会に出品されている。『徳川民部大輔歐行一件附録 卷十<sup>6)</sup>』の「博覧会出品皇國地図一件は、小栗上野介等による、慶応二年正月廿三日付の地図出品に関する上申ではじまる。

「西暦千八百六十七年第五月一日佛国都府於て博覧會之節御差廻し相成候様いたし度旨申立候品々之内御國圖之義は開成所おいて開板相成候伊能勘解由編述之實測地圖御差廻し相成候様仕度右圖は先年英國測量船江寫圖に而御渡相成候義も有之彼方に而も精微之段は賞賛いたし居候趣に付御差出相成可然と奉存候右之趣可然被思召候は、兼而摺立置候内に而鮮明之分相撰仕立箱等別段念入五部程早々御出来私共江相渡候様開成所江仰渡可被下候依之此段申上候以上」

幕府が公式に出品した最初の万国博覧会で、徳川昭武が將軍の名代として参加した。博覧会用の「別段念入五部程」については、表紙、題簽、箱、紐など二通りの見積が残る。ほかに昭武携行の土産用として、かねて外国人からの要望が強い品として「実測図十五部」が加えられている。都合二〇部がこの時ヨーロッパに渡つたことになる。

昭武が国書を携えてフランス皇帝ナポレオン三世に謁見した際の贈呈品五種中に「実測日本全図」が含まれる。土産の行方としてイギリス三部、イタリア国王マルタ停泊中のイギリス軍艦船将一部・フロリヘラルド殿下（フランス側の接待役）各一部、またベルギー学校頭取一部が記録されている。博覧会用の五部は終了後三部をホテルに贈り、二部は他の品々とともに、欧洲留学費用の補てん用として売却された。二部で八八フランという。なお、この五部の御買上代金は一九余りであった。

## 七 その他

文久元年、英國海軍による日本沿海測量が行われた

際、朝廷や伊勢神宮を擁する津藩から、外国艦船による伊勢海の測量に反対があり、これに応じた幕府は英國に対し、この海域の測量中止を申し入れるとともに、この部分については自國海軍による測量図を作成して提供するとし、英國の同意を得た。これにより、文久二年六月から慶応元年にかけて幕府海軍による勢志尾沿岸測量が行われた。その成果は全面的に明治期の海図にも用いられているが、その海岸線には伊能図の特色が見てとれる。これについては同図所蔵先経由での報告を予定している。

この測量にも参加した福岡金吾（久右衛門）は、慶応三年（一八六七）幕府の諮詢に対し「沿海測量につき答申」を出し、全体の測量には莫大な手数と費用もかかるので、船繫りにならない海岸線は伊能勘解由の製図を利用し、必要な修正を加え、暗礁、浅瀬、海底深浅等を委しく量ることにより、早急な海図整備ができるとしている。

### まとめ

江戸時代における伊能図利用の足跡を一覧してきた。これらの事実は、天文方測量図、精細細密な実測図などとしての伊能図の存在が、少なくとも関係者の間ではかなり広範に知られていたことを示している。海岸防備策の立案、諸外国との折衝など国土の正確な実態把握がもとめられた幕末期における利用はむしろめざましいと言えるだろう。シーボルト事件から三〇数年、幕府自体の判断により、小図の写本がイギリスに譲られ、同様の要請にこたえるための、印刷刊行にいたつていて。

明治を迎えて、新たな展開を示す伊能図の利用については、いずれ稿をあらためて追究いたしたい。

1) この時期佐渡奉行は二人制で隔年で在府・在島を交替した。

2) 幕府の定めた国絵図の縮尺は六寸一里（1:21,600）、五寸六分云々の縮尺は下げる渡された実際の国絵図を計測して算出したものであろう。

3) 東京大学史料編纂所

4) 同右

5) 同右

6) 『徳川昭武滯歐記録』（復刻）東京大学出版会  
一九七三

【文献】  
保柳睦美一九七四・『伊能忠敬の科学的業績』古今書院  
三八四

渡辺一郎一九九六・一九九七・諸侯の依頼による地図仕立て一・二・『伊能忠敬研究』第九号一二・第十号一八

日本経済新聞二〇〇四・測量図の出版意図示す書簡一揺らぐ『幕府の秘図』説一月二十五日文化欄（松岡資明同社編集委員）（『伊能忠敬研究』第三五号五八・五九所収）

相川郷土博物館一九八〇・『昭和五四年度特別展石井夏海・文海展図録』二三二・四（資料）『相川町史』岩本廣編昭和二年）

毎日新聞二〇〇六・伊能大図の写本発見—奉行所の絵図師作成、佐渡精巧に一一月一一日夕刊（佐藤由紀記者）

前田幸子二〇〇七・佐渡『伊能大図』の発見・『伊能忠敬研究』第四七号六・九

藤原秀之二〇〇七・早稲田大学図書館所蔵伊能図（大図）について・『早稲田大学図書館紀要』第五四号一・三七勝海舟一八八九・『陸軍歴史』（『勝海舟全集』12・13）

講談社一九七四  
二三二・二三六

高木崇世二〇〇一・二〇〇二・『官板実測日本地図』論考（一）・（三）『伊能忠敬研究』第二七号九・一五

福井保一九八五・『江戸幕府刊行物』雄松堂一九八五

倉沢剛一九八三・『幕末教育史の研究』一八五・一八六

福井保一九八五・『江戸幕府刊行物』雄松堂一九八五

高木崇世二〇〇一・二〇〇二・『官板実測日本地図』論考（一）・（三）『伊能忠敬研究』第二七号九・一五

第二八号 一五・二一 第二九号 一四・一九

## 長州藩毛利家の伊能測量記録（一）

渡伊鈴河  
辺藤木島  
一栄純悦  
郎子子子

②上関宰判本控三　両公伝資料二九三

享和三年至文化四年

③小郡宰判本控九　両公伝資料四四七

文化三年至文化六年　覺

④船木宰判本控十一　両公伝資料四八四

文化三年至文化九年

⑤船木宰判本控十二　両公伝資料四八五

文化八年至文化十一年

報告のあらまし

徳山毛利藩には測量御用意記（日本国際地図学会誌一四一号1998年、一四五号1999年で紹介、渡辺・伊藤）と称する詳細な記録が残されており、山口県文書館毛利文庫に収載されている。

支藩にこれほど詳細な記録が残されているのだから、毛利本藩にはさらに詳細な史料が伝えられているので、はなかと河島、鈴木、渡辺の三名で調査をおこなった。調査期日は二〇〇九年八月一八日、一九日の二日間である。目ぼしい発見がなかつたので、報告が延々になってしまったが、ひと通り報告をさせていただくこととする。毛利家の伝世史料はよく残っているが、藩政史料は火災にあつたとかで、まことに不完全であつた。目録から探索できたのは、次のような史料にとどまつた。

- （一）公儀諸事控　請求番号四一一八（二五一四）  
文化二年四月、第五次測量関係の記録である。
- （二）公儀諸事控　請求番号四一一八（二五一一〇）  
文化六年、第七次測量関係の記録である。
- （三）諸事小々之控三六八　請求番号三一一九
- （四）（四九一一五）文化三年

伊能測量について薩摩藩からの問い合わせなどを記す。少し面白い文書である。

- （一）三田尻宰判本控九　両公伝資料三六〇　享和三年至文化八年

解説は伊藤栄子、全体整理と史料解説は、渡辺がおこなつたが、毛利藩の職制、人物、慣例などの調査が不十分なため、雑駁な議論になつてしまつたことをお許し願いたい。大藩の公式文書にも、こんなことが出ているよ、というような理解がいただければ幸いであります。

（二）測量隊員の旅行と測量機器運搬に必要な人馬を提供する沿道の宿、町、村に対しても勘定奉行連署の上、宿町村の年寄共宛てに、提供すべき人数、道順の大要を示した命令を流した。

この命令は、江戸伝馬町の伝馬役が伝達を担当し、添え状をつけて村継ぎで発信された。刻付け（こくつけ）という至急扱いで、受け取つた宿町村では、受信時刻を請け書に記し、自分用の控えをとつて次に廻す。昼夜を問わず通送されたから、測量隊到着の遙か前に現地に到着した。

注　稿末の宰判区域図は、三田商学研究（二四巻第一号1981年1月）西川俊作「一八〇一九世紀における長州藩の宰判別人口増加」から引用した。斜線部分は支藩の所領である。書き込まれた数字は無視してください。

三、忠敬本人には、御証文という老中発行の旅行命令

山口県文書館蔵毛利文庫　公儀諸事控

文化二年四月より同三年寅年まで  
請求番号四一一八（二五一四）

注　幕府通達の測量順路は、例が多いので省略。

伊能測量について幕府から長州藩に宛てられた通達関係の記録で、今回はじめて活字化するものである。土井家文書もそうだが、伊能関係の記録では幕府からの通達が初めて出てくることが多い。これを体験付けると次のようになる。

一、第五次測量以降、測量ルートの大名に対しても、幕府は勘定奉行の名前で、江戸藩邸の留守居の役人を勘定所に呼び出し、勘定組頭と勘定（役職名）が列座の上、老中からの指示を書面で渡した。受け取つた留守居は領主便で国元に通報したので、その控が伝存していることが多い。本資料はその一つである。

書が渡された。旅行順路の大略を示し、利用できる人馬の数量が記載されている。

御証文の発行権は老中のほか、勘定奉行にもあるが、第五次以降の伊能測量では老中から御証文が渡された。

忠敬は現場到着の一ヶ月くらい前になると、宿泊日程を示した先触れを、自分が発信人となつて宿町村に流した。その際、老中発行の御証文の写しを添付したので、村方文書では老中御証文写しが一番先に書いてあることが多い。

以下、毛利家文書を追つて老中指示を伝達された以降の毛利藩側の動きを眺めてみよう

文化二年分

丑三月

吉村久右衛門

天文方高橋作左衛門付之手付伊能勘解由  
為測量御用順國之事

一、志道隼人より文化二年二月二十六日之書状を以御参勤御旅中へ申来候趣ハ、過ル十九日御勘定所へ御呼出ニ付、公儀所本メ役（もとじめやく）倉増十兵衛罷出候処、別紙之通御達有之候ニ付、此度差越申候間被仰上候様ニ付存候由、端書ニ享和二年五月大坂町人、間五郎兵衛測量為御用長崎へ差越歸路之節、御国中通路之節吉川和三郎殿へも可申達由、御達御座候ニ付於爰元達相成候処、此度ハ達之御使無御座候ニ付、於爰元御達し不仕候間、左様心得候様ニ付申来候ニ付別紙ニ奉令承：コピ一切れ、及御聞地方へ令沙汰候段及返答候□：見えない、

幕府勘定所から呼び出されて老中から、このような指示が渡されたことを、参勤交代の旅行中の毛利の殿

様へ書状を差し立てて報告している。老中の指示は、これほど重かったのであろう。

あと吉川家（分家）への伝達をするよう命じられてはいないが、先年、大阪町人・間五郎兵衛が測量した時は伝達を命じられたので、どうするとか、というやりとりがある。

撮影が悪くて、よく読めない部分があるがご容赦ください。流れには関係ありません。

間重富の例が出てくるところが面白い。間は、寛政の改暦では天文方同格とされ、旗本待遇だつたからそれが生きていたのであろうか。

以下は、他家にも例がある第五次測量にあたり老中戸田采女正より測量経路の大名あてに発せられた指令本文の控である。

通達の内容、道順はこれまでの史料と、少しも違ひがない。

＊

天文方

高橋作左衛門手付

伊能勘解由

作左衛門弟

高橋善助

同下役 弐人

同内弟子 四人

右は此度測量為御用、東海道通、中国筋、四国、九州、壱岐、対馬迄、罷越候ニ付、当二月下旬頃江戸出立  
別紙道順書之通、國々相廻測量可致候間、其段可被相心得候  
一、右ニ付他領并島々へ渡海之節は其所之領主より船を出し、差支無之様可被致候 尤測量道具為手入、止宿いたし候儀も可有之候間、是又差支無之様可被取計候

一、廻国先より江戸領暦所へ御用状差出候儀も有之候ハ、御領主便を以被相届、且江戸表より廻国先へ御用状差出候節、心当之場所其領主役人中へ可相達候間、其所へ到着以前ニ候ハ、着之上被届成立後ニ候ハ、先々相届候様可被致候  
右之趣可相達旨、戸（田）采女正殿被仰渡候間申達候  
丑二月  
西国筋測量御用  
伊能勘解由道順  
江戸出立、芝高輪より測量相始メ：以下略す

ついで、志道隼人から公儀の通達があつたとして、三月八日の書状で殿様の御旅中へ伝えてきた内容は次のとおりだつた。

一、志道隼人并公儀中より三月八日之書状を以御旅中へ申来候趣ハ、去月二十九日御勘定奉行小笠原和泉守殿より御剪紙を以天文方測量廻国ニ付、吉川寛三郎へ相達候儀有之候間、明晦日四時

御城中之口へ罷出候様ニ付之儀御座候且又寛三郎家来をも御呼出有之候付、為心得御達有之候由をも被仰下候ニ付、六兵衛儀中ノロへ罷出候岩国屋敷番有福新左衛門義罷出候付御勘定所へ新左衛門召連罷出候段六兵衛相届控居候処、

二月二十九日御勘定奉行小笠原和泉守殿より切紙で、天文方測量廻国に付いて、吉川寛三郎（分家吉川家当主）へ伝達するがあるので、翌三十日四つ時、御城の中之口へ罷り出るようとに通達があり、また吉川家家来も呼び出したので、心得として知らせるとの御達しがあり六兵衛（長州藩の聞き役か）が中ノロへ罷り出ました。

支藩の岩国藩（吉川家）からは屋敷番有福新左衛門が罷り出ましたので、六兵衛は御勘定所へ、新左衛門

を召し連れ罷り出ましたと届け出て控えて居ましたところ、

追付御勘定所於椽通御勘定組頭添田定市殿支配御勘定前田平右衛門方列座ニテ、先達て被仰渡候天文方測量之儀ニ付致廻國候段、此御方へ被仰渡候節、吉川寛三郎方へ達落ニ付、猶又申達候との儀定市殿、六兵衛へ被仰聞、先達て遂御注進候通之御書付兩通被相渡候ニ付、請取及相應候左候て新左衛門へハ天文方測量之儀、都合ニテ被仰聞候ニ付、罷帰屋敷番呼出被仰聞之趣申達候此段被仰上候様ニと存候此度之被仰渡書も先達て差越候分と同様之儀ニ付、差越不申候間、

左様可被成御承知候由申來候ニ付、令承知候段御着府之上申達候事

御勘定所の椽通で、御勘定組頭添田定市殿、支配御勘定前田平右衛門殿が出座して、先達て仰せ渡された天文方が測量のため廻国する件について、当藩へ仰せ渡された際、吉川家への通達が落ちていた。改めて申し達すと、定市殿が六兵衛へ仰せ聞かされ、先達て、御注進申し上げた通りの御書付二通を渡されましたので、受け取りました。

そうして（吉川家の）新左衛門へは天文方測量の事を仰せ聞かされたので、罷り帰り屋敷番を呼出して伝達するよう申し達しました。

以上の経過を（殿様に）言上いたしたく存じます。此度の仰渡書も（内容は）先達てお届けした分と同様なので、お届けしませんので、さよう承知するよう申してきました。承知した旨、御着府の上、申し達しました。

いやはや大騒ぎである。分家への通達を勘定所が忘れて、分家用の通達を作ったが、本家も引き合いに呼び出し、並んで全く同じ通達を受け、その経過を旅先の殿様に報告している。吉川家は將軍直属の藩とは認められていなかつた。

められていなかつた。

三月十六日之書状之節、伊賀より福原豊前へ申越候趣ハ当二月十九日御勘定所より御呼出ニ付、公儀所元メ役倉増十兵衛差出候處、天文方高橋作左衛門殿手付伊能勘解由其外測量為御用、東海道通、中國筋、四国、九州、壱岐、対馬迄被差廻候付、其段相心得差支無之様御領主より被仰付候様ニと戸田采女正様被仰渡之旨を以御達有之候廉々并道順書共委細別紙之通ニ付、御達書之趣ニ応し、諸事差支無之様沙汰可被仰付と之御事ニ付、御会釈旁の儀ハ因州芸州杯と之様子聞合被仰付、宜様御沙汰可被成候

その次は、多分江戸家老から国元の老職への伝達らしい。

三月十六日の書状にて伊賀（江戸詰めの老職か）から福原豊前（国元の老職か）へ伝えてきた内容。

当二月十九日御勘定所より御呼出があつたので、公儀所元ベ役（公儀所は留守居役か）倉増十兵衛を差し出したところ、天文方高橋作左衛門殿手付伊能勘解由

其外が測量御用のため、東海道を通り、中國筋、四国、九州、壱岐、対馬まで廻られるので、承知の上、差し支えないよう、領主から指示するようによ、戸田采女正様（老中）から仰せ渡され、道順書など委細は別紙の通りです。

御達書の趣に従い諸事差し支え無いように手配するよう（殿様から）御指示が出ています。

御会釈（お扱い）などについては、因州芸州などの様子を聞き合わせ、しかるべきお取り扱いください。

近隣の諸藩と均衡を考えてやつて欲しいと、恐らくこれだけが言いたかつたのだろう。

端書ニ吉川寛三郎殿へ本文之趣相達候様ニと追て去晦日御達有之ニ付、同日屋敷番へ公儀人より相達候由江戸より申来候御末家之儀ハ何共不申参候へ共、定て於江戸御達可有之候乍然、ケ様御國中へ一統之御沙汰事ハ於御國も猶亦御達有之筋共ニて候無御座候哉於其元似寄候類例僉議被仰付御沙汰相加候様ニと存候事

端書に（分家）吉川家へ本文の趣を通達するようと、三十日あと追いで御達しがありましたので、同日屋敷番へ公儀人より通達した旨、江戸より申してきました。

御分家からは何もいつてきませんが、多分、江戸で御達しがあるのでしよう。然しながら、かよう御國中一統への御沙汰事は、国表においても猶亦御達があるべき筋でしよう。そうではないでしようか。そちらで、類例を御僉議の上、御沙汰をされるのが、よろしいかと存じます。

國元で、分家の諸藩一統に通達しなくていいだろうか、という江戸側の問題提起のようである。

一、先達て間五郎兵衛回歴之節も御城辺測量之儀書記も有之、当御發駕前ニも御手子衆より城者手子衆迄相談之趣も有之由ニ候處、此度御達之趣ニテハ、執候道一覽等々御断達候ニ相成、吉敷（よろしき）儀と相見候付、御城内へさえ入不申候ハ、近辺海辺之儀ハ無支測量ニ相成候ても可然候猶御僉議之上御沙汰相成候様ニと存候、伊能勘解由と申人御旅下衆之由ニ候間、左様御心得候様ニと申達候處、追て四月二十四日返書を以、委細因州、芸州杯聞合申付可致沙汰之通委曲申越候事

先般、（大阪町人）間五郎兵衛が回歴の節も御城辺を測量の事が記録にあり、今回の御發駕前にも御手子





山口県文書館毛利文庫蔵  
御両国測量絵図 第三（伊能大図175号）部分 德山・三田尻附近

長州藩毛利家旧蔵の大図で、御両国測量絵図という名前がついている。全7枚のうちの、第三図の徳山、三田尻部分である。針穴がある伊能隊制作の副本で、長州藩の希望で謹呈されたと思われるが、入手経緯は分かっていない。1970年代に川村博忠氏により始めて紹介された。

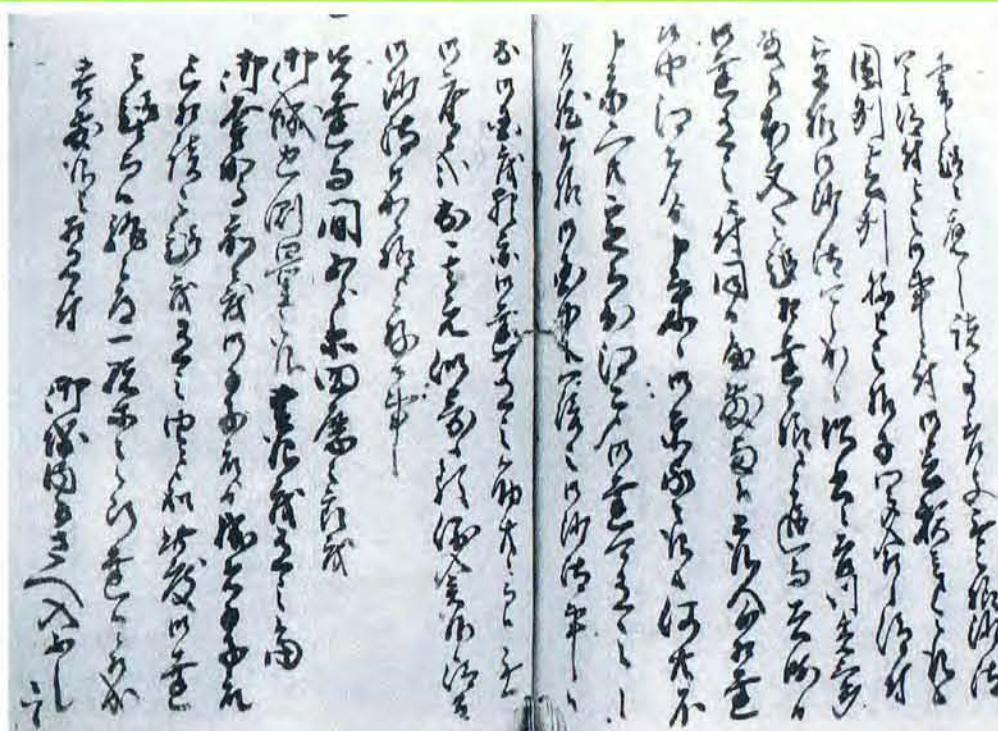
国界は黒色の|、郡界は黒色の○、村界は黒色の●で示している。国界、郡界の記号を黒で描く点と村界の表示がある点が他の大図と異なる。山景の緑は黄味が少ないが濃く鮮明。海岸の砂地は黄色、三田尻の塩田部が鮮やかで、伊能隊は外縁部を測っている。平野部では森林、田畠、沿道の家並を写生する。文字は達筆、書体は他の伊能図と類似する。接合記号はあるが、天測地点の記入はない。



衆（殿様側近の事務方）より城者手子衆（城付の事務方か）まで相談の趣もあるようですが、此度の御達の趣では、執行順路一覽等々の御断りがあり宣敷き儀と見えますので、御城内へさえ入らなければ、（お城の）近辺海辺は測量になつても差し支えありません。

猶、御僉議の上、御沙汰相成られるようにと存じます。伊能勘解由と申す人、御旅下衆（旗本ではない下役身分の意味か）のようなので、左様御心得なられるようとに申し達しました処、追て四月二十四日返書を以て委細は因州（因幡）、芸州（安芸）などに問い合わせ沙汰をするといつてきました。

城内に入らなければ何處を測つてよいとあるが、こんな議論がおこなわれたのは驚きである。



公儀事諸事控の一部  
城内へ入らなければどこを測つてもよい... と見える。

山口県文書館蔵毛利文庫 公儀諸事控

請求番号四一一八（二五一一〇）  
文化六年

本史料は、九州第一次（第七次測量）測量関係の記録である。形どおり幕府の通達から始まる。幕府も同じ文言の通達を大藩には個別に渡すので大騒ぎだつたろう。何十通も筆写しなければならない。洩れが出てもおかしくはない。

測量御用トして伊能勘解由諸国  
被差廻候段御達之事

一、御達之儀有之候間、明後二十六日四時大手御番所後御勘定所へ可罷出旨、小笠原伊勢守殿より御切紙、只今到来仕候依之稻村小兵衛差出可申之段、已八月二十四日公儀人中より申出候付、及御聞候事

一、今日御勘定所へ御呼出二付、稻村小兵衛罷出候處、御勘定組頭加藤總兵衛殿、御勘定大島次郎太郎殿御列座二て左之趣御國元早々被仰越候様被申聞候二付、請書印形：見えない相調差出候由、翌二十六日公儀人中口：見えない申候二付及御聞候事

天文方

高橋作左衛門手附

伊能勘解由

右順書之通國々相廻候 尤其所之様子二て最前山々、城下街道等も相測候間、少々宛前後二も可相成事右御勘定所へ岩国屋敷番朝枝三平儀も御呼出二て罷出候二付、御用向内々小兵衛より根（カ）立長右衛門を以斬見候事

此（カ）御方御同様之被仰渡有之趣二付、不捨置、猶亦長右衛門を以兼ての趣一通り申入候得ば、最初御呼出二て罷出候上之儀二付、不相捌此上致

方も無之、依て御大名様方への被仰渡相済候跡二て、小兵衛、三平同被召出、可被仰渡之由二付、左候ハ、一同罷出候上小兵衛へ被仰渡御書面御渡も有之候ハ、此方へ御渡被下候様仕度段申入候處、其通可致之由二付夫ニて差置候

左候て御大名様方被仰渡相済候上、小兵衛、三平一同御席へ御呼出ニて最前之通加藤殿 小兵衛へ被申聞候付奉畏候

まず殿様に状況が言上される。  
また、岩国藩への扱いでもめている。長州藩では支藩として認めず、毛利の家臣の扱いだつたというから、大名と同列でなかつた。

一方、ここでは「・・・依て御大名様方への被仰渡相済候跡ニて、小兵衛、三平同被召出、可被仰渡之由二付、」

とあるから、沿道の諸侯への通達は、一藩づつ呼び出すのではなく、沿道の大藩と小藩グループの触れ頭の藩を一度に呼び出し、次々に渡されたことが分かる。

幸之助へ可申聞段及請書、因請取退座、前段受書相認差出候直様八十吉小屋へ参候様三平へ申聞罷帰、前所（カ）之趣小兵衛より委曲申出候左候て写を以山添八十吉より朝枝三平へ相達候事  
右之趣二付、御国毛利大蔵へ八月二十八日之書状を以□□三郎右衛門より過日二十六日御勘定所御呼出二付、公儀所本メ役稻村小兵衛被差出候處、天文方高橋作左衛門殿手附伊能勘解由其外測量為御用日光街道より木曾路通、西国筋九州迄被差廻候二付、其段相心得差支無之様との儀、牧野備前守様被仰渡候間、御国元早々可被越之由、御勘定組頭加藤總兵衛殿、御勘定大島次郎太郎殿御列座ニて被仰渡、御達之廉々井道順書は委細別紙：前々相見候：通御座候条、諸事過ル丑年巡行之節之趣を以、可被成御沙汰候

文化二年と同じような流れである。吉川幸之助は岩国領の当主。

以下に出てくる接遇状況の記述は意外な感じがするので、そのまま意訳する。

「一八一九世紀における長州藩の宰判別人口増加」  
三田商学研究 二四卷一号 一九八四年四月

西川俊作

より

端書二吉川幸之助殿へ御達候儀も、過ル二十六日屋敷番一同御呼出有之、諸家一統之被仰渡相済、亦々小兵衛并屋敷番朝枝三平被召出、最前之趣御兩人御列座之上總兵衛殿より小兵衛へ被申聞、此段幸之助殿へ申聞候様ニと之儀ニ付、及請罷帰即日兩通之写相調、三平呼寄公儀人山添八十吉より申渡候間、左様御承知於其元御末家岩国へ御達之儀は何も過ル丑年之通可被成御沙汰候、

御細書別紙旁委曲令承知、御末家方定掛へ達之儀過ル丑年之趣を以、令其沙汰候由、九月二十八日之返書ニて申来候事

御あしらひ向之儀、去ル丑年之趣を以令沙汰候賄之儀聞繕之上、上筋用意之振を請、一汁三菜旅籠仕出、酒菓子等をも差出候處、翌朝より一汁壺菜ニして差出候様ニとの事ニて、其通令沙汰候酒、菓子之儀も一向相断候付差控候由、且亦米代木錢とメ相応払方相成ル由、前断之通御國中無滞測量相済候由、所之御代官中八幡方より届出候条、此段御序を以被及御聞候様存候由申来候ニ付、達御聞候趣二月六日及返答候事

吉川家への通達があらためておこなわれたことも、御末家一同へ通達のことも文化二年と同じだった。次の文書は、国元の毛利大蔵から（江戸の）□□三郎右衛門へ日程経過の報告記録である。今回は山陽道を測つたが、文化六年一二月一〇日から二六日まで一七日間で測りおえている。

大蔵より午正月八日之書状を以三郎右衛門へ

天文方高橋作左衛門殿手附伊能勘解由

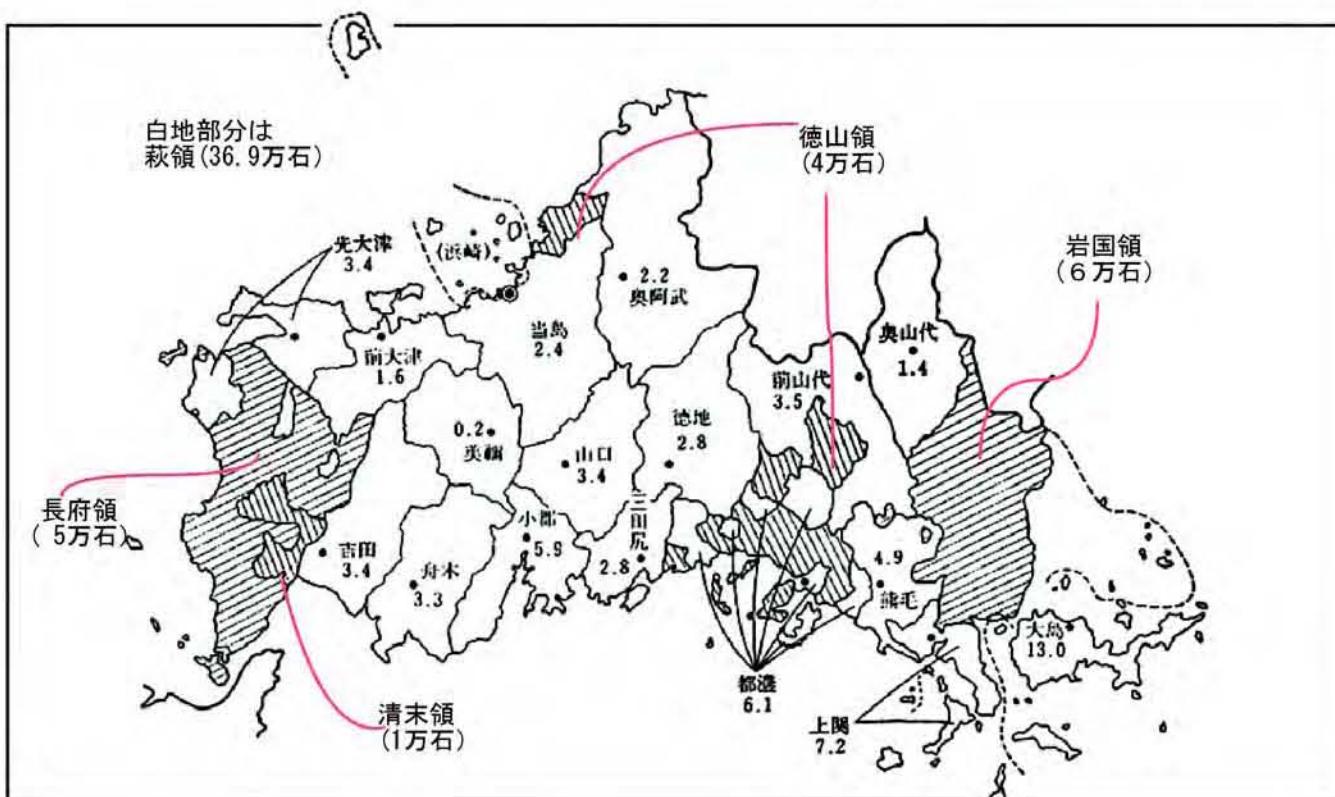
手伝勤方坂部貞兵衛、下役下河辺政五郎

青木勝次郎、永井要助事、

測量為御用去十二月十日芸州より御国引移十二日呼坂（よびさか）泊、十三日都濃郡引移相成筈候處、雨天ニて測量不相成同所相滞、十四日充（カ）岡泊、十九日山中泊、二十日船木市泊、二十一日吉田泊にて順々測量相済、二十二日長府御領へ引移、二十四日赤間関、二十七日出立小倉渡海相済候由

末筆ながら、本稿執筆にあたり、金沢の河崎倫代さんに、お世話をになり御教示いただきました。

御礼申し上げます。



## 忠敬旧宅雑録 (二)

伊能 洋

忠敬旧宅は書斎と小野川に面した店舗が、広い板の間の台所で連結されていた。私が疎開していた昭和十八年当時、祖母の部屋があつた店舗部分にはガラス戸が入っていたが、書斎部分は雨戸と障子だけで、私に与えられた東南角の六帖間は冬の暖房と言えば小さな火鉢が一つ、今考えると信じられない厳しさだったが、当時は子ども心にも当然のこと受止めていた。

書斎の八帖間は當時開け放たれていて、毎日のように見える見学者（地図見と呼んでいた）に備えていた。床の間には忠敬先生日記が堆高く積まれ、家牒、旗門金鏡録などの家史、和数字の対数表などが置かれていた。當時お見せした量程車は、小学生の私にとつては格好の遊び道具で、回り廊下をまたがつて走らせ、祖母に大目玉を喰らつたりしていた。その量程車が現在では国宝の一点になり、白手袋で取扱われているのをみると、何とも言えない思いである。肝心の地図は軸装の中図の二、三点を主に説明し、特に要望があると大図を文庫蔵から出して来ることもあった。

八帖間の東側の欄間に「山間名月江上清風」と書かれた横額の一軸が掲げられていたが、作者名までは記憶がない。

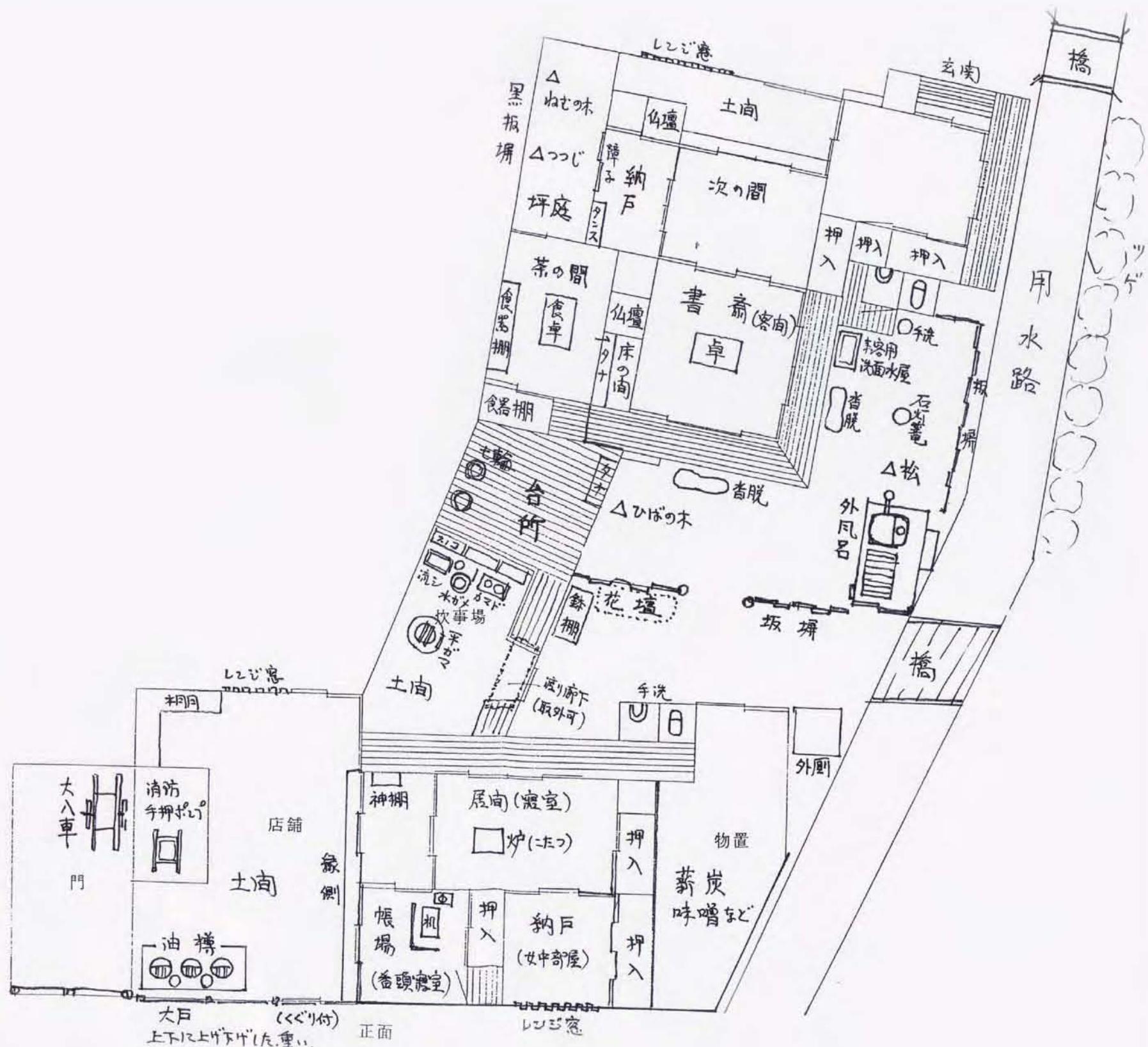
書斎廊下の南隅には洗面用の水屋があり、銅の金盥、塩の小皿（歯磨き用）などが置かれていた。夕方書斎南側、西側の雨戸を繰るのは私の仕事だった。東側には六帖の次の間があり、一間ほどの土間が続いて中庭に出られた。次の間の長押には槍、薙刀などが三、四本掛けられていたが、戦時中の金属供出で先端は切られ、長い柄だけが残されていた。商家だったが苗字帶刀を許されたことで、武器の保持も認められたのだろうか。そう言えば文庫蔵には青糸緘しの鎧一輛も鎮座していて、五月の節句には着用に及んで写真を撮つた記憶がある。その鎧は戦後あえなく貴重な食料になつて消えたようである。書斎の北側には細長い茶の間があり、三度の食事はここでとつた。東側にはねむの木とつじなどが植えられた坪庭があり、軒には釣忍が下げられていた。朝食の前には、何があつても一杯の日本茶と梅干しの一箇を摂るのが習わしだった。

茶の間に続いて八帖ほどの板の間の台所と同じ位の広さを持つた土間が、書斎と店舗を結んでいた。黒光りする台所は、奉公人の食堂であつただろう。流しの横には大きな水瓶が据えられ、文庫蔵の横にあつた跳鈎瓶の井戸から、地中に埋められた竹管の水道を通して水が送られる仕組になっていた。

天井には煙出しが設けられ、土間に大振りの平釜と銅製の竈、板の間の隅には七輪、火消壺などが並び、土間の隅には常時、枯松葉、薪、小枝などの燃料が積まっていた。板の間の何か処かは揚げ蓋になつていて、壺や瓶類の収納庫になつていた。（続く）



伊能忠敬翁書斎



↑伊能忠敬旧宅平面図 1/100 伊能 洋氏による手書



伊能忠敬翁書齋 ⇒⇒

伊能忠敬記念館前のこの書齋は現存し、  
店舗、正門、土蔵とともに、国指史跡に、  
昭和5年4月25日、指定されている。

← 伊能忠敬旧宅前を流れる小野川

# 伊能三郎右衛門家を再興した伊能源六景文と海保家について

## 海保英之

の考八郎は茨城県議会議員及び衆議院議員を務めたといふ。

(編集部まえがき) 伊能三郎右衛門家を再興した伊能景文は、忠敬の実家海保家縁戚の屋形村(現横芝光町屋形)名主・海保長左衛門寿考(屋号千神)の三男だつた。伊能茂左衛門景晴の娘・伊能イクと夫婦養子として迎えられた。(イクの没後、景文は大網町板倉氏の娘ヒサと再婚)

伊能忠敬の孫忠誨(ただのり)の病没後、妻は実家に帰り、約三〇年間伊能家に空白が続いた。幕末になって、伊能家を再興しようということになり、伊能景晴(号は節軒)らの尽力で、安政四年(一八五七)養子縁組が成立したが、その理由・経緯などは史料的には明らかでない。そこで、景文と海保家について、海保家側の資料・伝承から解説していただいた。

海保景文は、伊能家に入夫後、伊能源六景文として家業の隆盛に努め、伊能家は景文の代に繁栄したと伝えられている。大正三年一月に八十歳で没した。墓は、伊能三郎右衛門家墓地の景敬の墓の右端にあり、戒名は「高章院徳教興居士」と記される。

土浦(茨城県)の醤油醸造を家業とする色川家に養子入りした弟の考八郎(色川英俊)とともに政治に志し、明治期最初の千葉県議会議員として活躍した。弟

伊能景文の墓  
(香取市佐原觀福寺境内)



は代々長右衛門又は長左衛門と名乗り、九十九里地方きつての網主で、大地主でもあった。その規模を示す逸話のひとつとして、自分の家から海岸まで(約2キロ)全て自分の土地を通って行けたという言い伝えが残っている。

代々屋形村の名主を務めるとともに、九十九里地域の大名主も務め、九十九里浦千戸の上に立つというこ

とから、屋号を千神と称したと伝えられる。

文人、墨客との交流も多く、特に幕末の剣豪中村一心斎、絵師の春木南湖、勤皇詩人梁川星巖、日本最初の農業協同組合の基礎を創った農学者大原幽学等は、

海保家に長く逗留していたようである。

一族からは、主なところで、幕末の儒学者海保漁村、経済学者海保青稜、書家海保射村、剣豪海保帆平(北辰一刀流)坂本竜馬入門時の千葉道場師範代)、明治の衆議院議員色川佐太郎、地域の歌人海保瓜州(松尾芭蕉系)などの人物を輩出している。

海保家の先祖は清和天皇に始まり、当初は源氏を称し、次いで新田といい、その子孫が群馬県の里見地区に移り里見を名乗る。

結城城落城により安房(南房総)に逃れ、安房の城主となつた。最初の城主里見義実(里見八犬伝の伏姫の父親)の弟・匠之介(氏義)が兄の義実と不仲になり、海保村(千葉県市原市海保地区)の海保城に移り、海保一族の始祖海保大隈守氏義は、里見家と対立する千葉氏の執權職となり、以来、大隈守から甲斐守(海保甲斐守氏次)までの九代にわたり、千葉氏の執權職を務め、戦の際に総大将等として里見氏等との戦を繰り返した。

大隈守はやがて佐倉城(元佐倉城、現千葉県酒々井町)に移り、やがて寺台城(現成田市寺台)、宝田城(同宝田)を居城とした。

海保一族最初の城主甲斐守の父丹波守は、小田原北条氏の奉行衆として一時小田原城にも参勤し、通行手形の発行などの職務を行い、一方では千葉氏の執權職として、千葉氏配下の諸将に対し丹波守名で命令書(横芝町史に収録)を発し、戦に際しては総大将として出陣することもあった。

伊能家も諸将の一員であったので、海保家と伊能家は、この頃から交流はあつたろう。

また、寺台城最初の城主甲斐守は、成田山新勝寺のご本尊の不動明王を深く信仰し、成田の西方の小さなお堂に安置されていたお不動様を、寺台城の一角(現在の成田山新勝寺の場所)に諸堂を建立して移したと伝えられる。

この間、甲斐守は、お不動様に願をかけ、関東一の怪力を授かつたという。徳川秀忠が真田昌幸親子が守る信州上田城を攻めた際には、難攻不落の上田城に一番乗りを果たしたり、里見氏との戦では、戦の最中に討ち死にしたが、お不動様の使いの背偉多加童子が現れ、たちまち傷を治し、生き返らせたと伝えられる。

これらの物語りは、成田山新勝寺の由来にも残っているほか、我家の伝承でもある。成田山の朱塗りのお不動様は、甲斐守が満願の日に怪力を授かつた御札として、朱の衣の代わりに赤く塗つたものと伝えられている。

しかし、豊臣秀吉の小田原攻めとともに、関東諸城は、秀吉の命を受けた徳川家康により次々に開城させられ、寺台城や宝田城も廃城となり、海保家は旧領地の屋形村に住みつき、屋形村の農業の草分けとなり、網主ともなつた。

漁業家としての海保家は、地引網漁法に大地引の手法を九十九里では初めて導入するなど、鰯を中心とした地引網漁を行い、隆盛を極めたが、やがて不漁が続



千神家代々の石塔（正光院無量寺境内）



愛宕神社（旧海保神社 千葉県山武郡横芝光町屋形）  
網主であった千神家が船の火災予防祈願のために建立。  
愛宕神社に改名（昭和20年）。祭神は「天之阿具士命」筆者管理

くようになり没落した。現存して、往時を忍ばせるものは、累代の墓地と神社（旧海保神社。終戦後に愛宕神社と改名、小生が管理）が残るのみとなつた。海保家はかつて有力な諸家（名主層）との縁戚関係が多く、忠敬婿入りの際、親元となつた平山家とも当時縁戚関係にあつた。

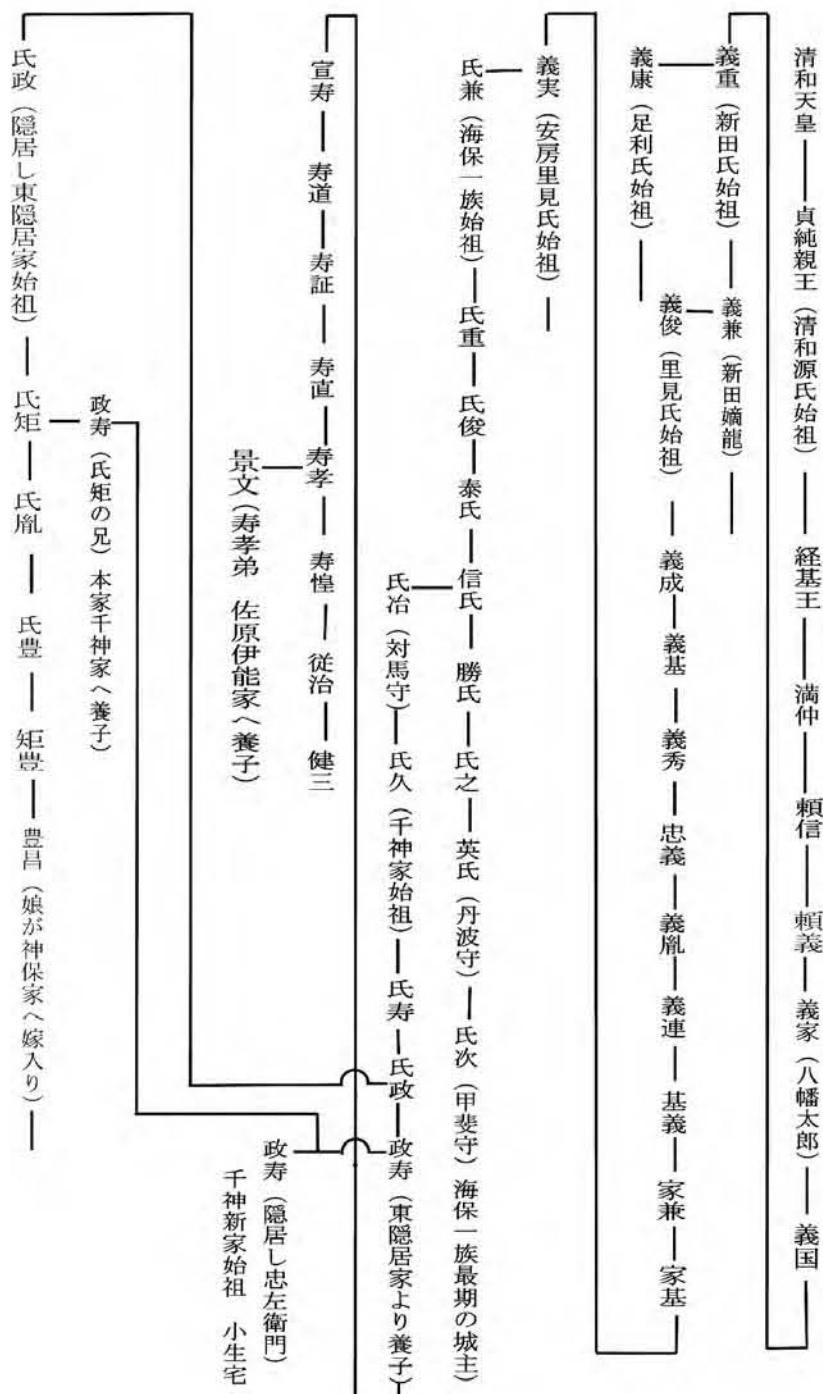
小堤村の神保家とは、千神海保家の分家・海保兵右衛門家（屋号は東隱居）が縁戚関係にあり、忠敬の十九里浜測量当時は、当主豊昌の娘富美が神保家の当

主忠敬のもとに嫁いでいた。

これ以前にも兵右衛門家と神保家は、忠敬の父幸宗（伊能忠敬の従兄）の代から、俳諧の道を通じて親しい間柄であり、分家の中西家には、子供の頃の忠敬が遊びに来たとの言伝えが残つてゐる。

測量途上の忠敬が海保兵右衛門家に宿泊したのは、從来からの御縁と、当時兵右衛門家が本家の千神家に代わり名主であつたためと思われる。

## 景文の生家千神海保家系譜



## 追記 伊能景文について 渡辺一郎

書などに手掛かりがあるかもしれない。

安藤由紀子・伊能陽子編 世田谷伊能家伝存「伊能

忠敬関係文書目録」の年表によれば、忠誨の病没は文政十年（一八二七）、シーボルト事件の発生が文政十一年である。

このあと伊能家の事績は空白となつて、神保家の縁戚海保家から景文が入夫して伊能家四代を継ぐのは安政四年となっている。この間は約三〇年である。

忠誨には子がなかつたので、養繼嗣として永沢氏から駒吉という者が入つてゐるが、弘化二年（一八四五）に離縁になつてゐる。入夫の時期は分からぬが、忠誨の死去は二歳くらいだから、生前の養子は考えられないだろう。

死後、ある時期に、親戚協議の上できまつたのではなかろうか。もし、直ぐ決められたとする、離縁まで十八年、養家における地位は安定するはずで、離縁は考え難い。

伊能家の伝承によれば、この長い期間、伊能家の営業は親戚管理のもとでおこなわれていたといわれる。一八四〇年代になってから、何等かの理由で、伊能三郎右衛門家を再興しようという議論が親戚間で起こり、養繼嗣として永沢家から駒吉を迎えた。ところが、駒吉に伊能家を継承する能力がないことが分かつて、すぐ離縁された、と考えるとあり得ないこともないだろう。

そして安政四年（一八五七）頃に景文が入夫する。彼は伊能茂左衛門節軒の指導をうけて、三〇年間放置された伊能三郎右衛門家の立て直しをおこなつた。節軒の没年は明治十九年（一八八〇）、景文の没年は、大正三年（一九一四）であるから、伊能図が明治日本の表舞台に登場する経過はすべて景文の時代であつたということが出来よう。

伊能家空白の三〇年間と景文の入夫経緯について、研究が必要な気がする。伊能家と親戚関係との往復文

書簡にみる人物関係  
(伊能節軒・伊能源六・伊能七左衛門・宮内克太郎)

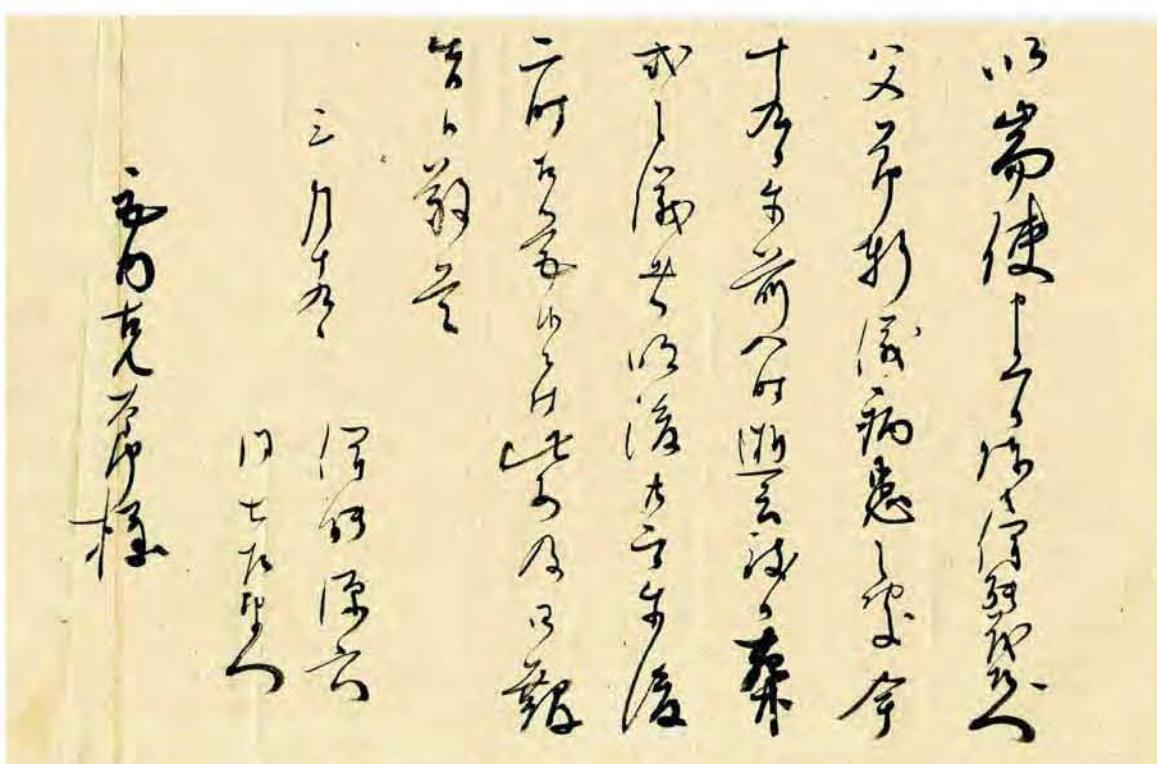
景文と関係があるかどうかは分からぬが、伊能測量の影の功労者である桑原隆朝の書状が、これまでの調査では、伊能家から一通も出ていない。

周辺状況からは、考えられないことであるが、空白期間あるいは景文の時代に整理されてしまったのであろうか。これも大きな疑問である。

伊能節軒逝去連絡書簡（明治十九年三月十九日逝去）

伊能節軒（景文）の配は伊能茂左衛門節軒の次女（イク）で、節軒は源六の義父にあたる。また、節軒の長女（ムラ）の嫁（茂太郎）は野尻（現銚子市）の滑川家の四男で、その姉（滑川ヤス）は宮内克太郎の母親である。

伊能七左衛門成徳の配（海保やす）は源六と姉弟であり、克太郎の配（伊能多恵）の母親である。源六は多恵の叔父にあたる。多恵の弟（端美）は景文の長女（孝）の配となり三郎右衛門家を継いでいる。（宮内敏記）



伊能源六（景文）：伊能七左衛門書簡

解説 古文書研究家 伊藤栄子氏

以而使申上候 陳ば伊能茂左衛門

父節軒儀病患の處、今

十九日午前八時逝去致候 葬

式の儀は明後二十二日午後

二時相営候ニ付、此段及御報

告候 敬首（具）

伊能 源 六

三月十九日

宮内克太郎 様

同 七左衛門

\*陳れば・・・のぶれば

\*御報告ニ及び候



佐原における伊能忠敬について、原史料にあたり、きちんとまとめられた名著。分量もほどほどで、読みやすい文章である。

・松崎利雄「江戸時代の測量術」一九七九年  
江戸期の測量術についてわかりやすく解説。

・渡辺敏夫「近世日本天文学史」恒星社厚生閣一九八六年  
寛政の改暦の経緯、麻田天文学、高橋出府、など當時の曆学、天文ならこの本である。

・千葉県史料「伊能忠敬測量日記一」一九八八年

千葉県  
伊能忠敬記念館に二種類ある測量日記のうち、伊能忠敬先生日記を底本として、千葉県で現代文に訳された日記。なぜか、第五次測量で終わっている。本資料と似たような資料として、各地で関係地域のみの測量日記を出版したものが、いくつか見られる。

・洞富雄「間宮林蔵」吉川弘文館一九九〇年  
林蔵の研究書は沢山あるが、一つだけ挙げる。

・井上ひさし「四千万歩の男」一九九〇年 講談社



## 四千万歩の男

広く知られている小説である。必読書ではないが、私見を記しておく。

井上氏がオーストラリア旅行中に、伊能忠敬＝人生

二山説を思いつき、大河ドラマに、ということで書き始めたという。わけは知らないが、大河にならないことになって、途中で中断された。

無味乾燥な測量日記に同時代の面白い話をつけ加えて楽しく読ませてくれる。さすがに筆力である。ただ、本人がいつているのだが、昼間は日記があつて誤魔化せないので、事件は夜おこした。

昼間は史実だが、夜はフィクションなのでその積りで読んで欲しい。それから、カバーしている時期は、第二次測量の伊豆半島あたりまでなので、伊能測量全体の一〇分の一以下だろう。しかし、彼はこの本を書く為に事務用本棚二本分の資料を集めしており、その中に測量日記原文の影印本も交じっていたので、ビックリしたことがある。勿論、ここまで述べた資料などを全部揃っていた。

余滴（追悼 井上ひさしさん）

なぜ、そんなことを知っているかといえば、伊能ウオーカーを検討していた頃に、「忠敬が測量中に門弟に測量術を講義した講義録があつて、井上ひさしが古書店から二百万で買った」という話を聞いたからである。そんなものがあるなら大変と、早速、見せて貰おうと思い、秘書を通じて申し込んで、川西町のこまつ座まで家内と出かけたことがある。

結果は大発見ではなくて「測遠術問答」。富山の石黒信由との問答をまとめたもので、富山の高樹文庫にも伊能忠敬記念館にある資料だった。

これが、二百万？ 資料に惜しみなく資金を投じるから面白い種が集まるのだな、と感心したのを覚えている。

こまつ座は川西町が作った文化施設で、駅のすぐ裏にあって図書館も併設されていた。劇場では井上ひさしの作品が毎年上演されるが、数日興行すれば町民は全部見てしまうので、他の劇がかかっても、空いている。

たまたま伊能ウオーカーを検討中だったので、気勢を挙げるために出版パートイイが開かれた。内容が珍しかったため、読売以外の全中央紙の書評欄でも取り上げられた。

幸運に恵まれて二ヶ月で再刷となり、六刷までおこなわれて約七〇〇〇冊を完売し絶版となつた。残部はフロア展事務局保有分のみである。

始められたという。井上さん所蔵の図書も預けられていて、図書館の職員であり、井上さんの秘書でもある方がいて、管理しておられた。

井上さんが買った本は整理してしまっておき、必要に応じて指示がくるので、宅配便で送るのだという。川西町では井上さんは超有名人だったが、すぐ効率的な蔵書管理システムだと思った。

・渡辺一郎「伊能測量隊まかりとおる」一九九七年  
NTT出版

一九九五年にフランスから伊能中図を佐原に招聘と決まったとき、日経新聞が最終頁の文化欄に大きくとりあげていただいたが、その文言の片隅に集めた資料で本を書きたいとしておいたところ、古巣のNTTの出版子会社の編集者から話があつて、生まれて始めて書いた本である。

伊能諸図の制作年代、特徴を整理して体系化を試みていたし、各地の村々の測量対応に关心を持つて資料を集めしており、また世田谷伊能家にあつた珍しい資料にも多く接していたので、これらをもとに執筆したら膨大なものになってしまった。

一般に書物は分量、定価、発行数など、出口戦略を決めてから作られるが、そんなことは少しも知らなかつたし、依頼する方も、何が出来るか書かせて見てからというような、軽い気持ちだったのだろう。

頑張つて資料を整え、初版三〇〇〇部、三八〇〇円という、売れるかどうか分からぬ、とんでもない本が出来てしまつた。

たまたま伊能ウオーカーを検討中だったので、気勢を挙げるために出版パートイイが開かれた。内容が珍しかったため、読売以外の全中央紙の書評欄でも取り上げられた。

幸運に恵まれて二ヶ月で再刷となり、六刷までおこなわれて約七〇〇〇冊を完売し絶版となつた。残部はフロア展事務局保有分のみである。

・伊能忠敬研究会編「江戸東京博・伊能忠敬展図録」

伊能忠敬と伊能図

一九九八年



江戸博の担当者から「伊能忠敬展」ではお世話になつてゐるが、研究会には法人格がないので、共催とか後援とか協力として名前を載せることはできないといわれる。いまなら、そんな失礼なことは、まず考えられないが、当時では致し方なかつた。

それでは、図録に名前を残そうということになつて、伊能忠敬研究会編として会員各位に分担執筆をお願いしたもの。制作者は、アワ・プランニイングで、発行江戸東京博物館として一万部を会期中に完売した。現在流通している「忠敬と伊能図」は、同内容でアワ社が増刷した分である。

・佐久間達夫「伊能忠敬測量日記」全六巻、別巻一定

価七五、〇〇〇円 一九九八年 大空社 絶版

私が日経文化欄で紹介されてから、誰か他の人を紹介してよ、といわれて佐久間氏を紹介したところ、伊能忠敬記念館の館長勤務の傍ら、タイプを購入して測量日記を現代語訳した話が掲載された。

それがキッカケで大空社から話があつて刊行されたと考えられる。佐久間氏の労作で全国の主要図書館に収蔵されている。千葉県史

料の測量日記とちがい、清書本を底本としている。

ただ、佐久間氏は古文書の専門家ではないので、多少誤読が見られるが、専門家が手を出さないことに敢えて挑戦して、全編完訳されたことに心から敬意を表している。

最近、私を中心とする有志で、イノ・ペディアをつくる会を結成し、国宝となつた伊能忠敬測量日記の原文をDVD化したが、これと佐久間日記を対照して、完璧な訳本を作成し、注釈もつけて、DVD化できれば、素晴らしいと思っている。

ライフルともなる仕事です。御希望の方があられたら、連絡をお待ちします。

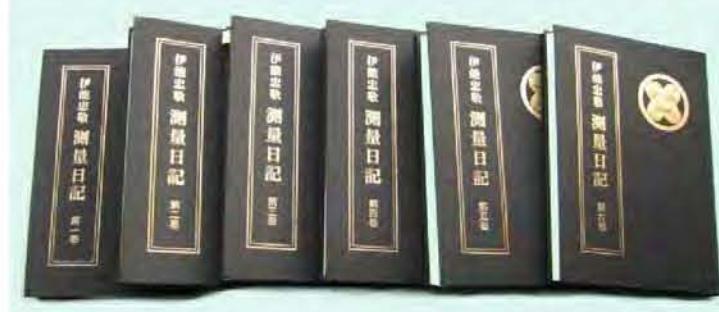
・渡辺一郎「伊能忠敬の歩いた日本」一九九九年

「伊能測量隊まかりとおる」はいいけど高すぎる、という意見があつたので、ちくま新書として刊行した。

「まかりとおる」の要点をまとめたもので、一万二千部刷つたがいまは完売して絶版。古書しか入手できなさい。

・渡辺一郎・鈴木純子「伊能忠敬の地図をよむ」

伊能図のことだけを書いた唯一の書籍。グラビア写真が多い。伊能図について体系的に知りたい方は本書をご覧ください。



約一〇年前に発売。三刷を重ねて、一万四千部完売したが、好評なので、鈴木純子さんに共著者になつていただき、最近の諸発見の経過を追記して六千部増刷した。

旧版をお持ちの方の追加購入が多いという。巻末の「現存伊能図一覧表」には全世界に散在する伊能図の所在と概要を明記している。

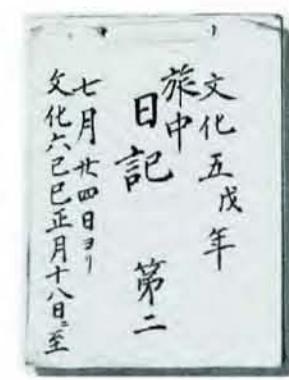
・伊藤一男「新考 伊能忠敬」二〇〇〇年岩書房出版



著者は故人になられたが、九十九里における史料をよく発掘しておられる。大谷氏がいい加減な伝承で片づけている部分について史料で検証されている貴重な研究である。

・安永純子「伊能測量隊員旅中日記について上下」愛媛県歴史文化博物館研究紀要六号二〇〇一年知られている唯一の測量隊員日記の紹介。柴山伝左

衛門作成の四国測量の日記を解説し注釈されている。



愛媛県歴史文化博物館所蔵

・伊能忠敬研究会編「伊能忠敬未公開書簡集」  
二〇〇四年

・渡辺、清水、長岡編「東京国立博物館蔵 現寸複製  
伊能中図」二〇〇二年 武揚堂



伊能図百科事典を兼ねた伊能中図の切り図集。東京国立博の中図を眺めるならこの本。



世田谷伊能家にあつた忠敬の書状の下書き集である。現在は、大部分が国宝に指定されている。伊能図の出版企画を思われる下書きがあり、歴史の通説に影響がありそうである。非売品、残部僅少。希望者は二千円同封し事務局へ。

・渡辺一郎監修「伊能大図総覧」上・下 二〇〇六年  
河出書房新社



・星埜由尚「完全復元伊能図」二〇〇九年



大谷「伊能忠敬」に対抗する現代の大著。日本国際地図学会から作品賞受賞。

・星埜由尚「伊能忠敬」(日本史リブレット057)  
八八頁 二〇一〇年 山川出版社  
補助教材、副読本的な出版で、内容は正確を旨としている。

・アメリカ大図展実行委「アメリカにあつた伊能大図とフランスの伊能中図」二〇〇〇四年  
アメリカ大図展の図録。アメリカ大図の模様はこの一冊で充分。フランス中図の部分と全体も掲載する。渡辺、鈴木が中心となつてまとめた。

アメリカ大図、国会図書館大図、海上保安庁大図等によつて全伊能大図を復元した学術出版。重量二〇キロ、定価約四〇万の豪華本。個人向きでなく、図書館向き。限定三〇〇部。発売一カ月で完売したまばろしの伊能図誌。渡辺、鈴木、星埜、西川の各会員執筆。

あとがき

思いつくままに基本資料を挙げてみた。伊能図に偏っているかも知れないが、伊能忠敬と伊能図については、ほぼ網羅していると思う。その他関係人物、同世代についても定評ある研究書は存在するが、目を通していないので書かなかつた。

## 京都大学図書蔵伊能大図稿本・天理大学図書館蔵伊能中図の閲覧調査の報告

去る四月二十三（月）、二十四日（火）京都大学図書館と天理大学図書館を訪問し伊能図の閲覧調査を行いました。

両図書館とも、研究目的による特別な利用ということで、人数が厳しく制限されていたことから、人数枠を限定した有志による調査となりました。

事前に各人が貴重資料閲覧願（京大）、特別本閲覧願（天理大）を提出し、閲覧許可書を持参しての閲覧となりました。

二十三日、十二時半に京都駅前に集合し、バスで京都大学に向かいました。

「京大総合博物館」のセミナー室を控え室として用意して頂き、そこから隣の「附属図書館」に移動しました。貴重図書閲覧許可書と身分証明書を提示して入館、貴重品を除くカメラや携帯などをロッカーに預け、係員の誘導で閲覧用の個室に向かいました。

閲覧は図書館の担当職員二人が終始立会いする中で十四時00分～十六時三十分の間行われました。資料撮影は禁止の為、出来るだけ頭に覚え込ませようと皆

さん真剣の様子でした。予定の二時間半はあつと言う間に過ぎてしました。

夕刻は、明治の元勲山縣有朋の別邸であった「がん

こ高瀬川源流庭園二条苑」の素晴らしい庭を散策ののち、邸内では会食、懇親を深めました。高瀬川は鴨川の分流「みそぞぎ川」から取



高瀬川源流庭園二条園



懇親会で

天理大学図書館も、京大図書館とほぼ同様な手続きをした後、ロッカーに荷物を預け、手を洗い、入館したのは予定通りの九時二〇分でした。こちらも図書館員二名の立会い下の閲覧となりました。京大同様、天理大も、あつと言う間の二時間でした。

帰路はタクシーに分乗して天理駅まで行き、そこで自由解散となりました。

### ・参加者

渡辺一郎  
星埜由尚  
鈴木純子  
伊能洋  
高安克巳  
高宮勲  
高宮リヨ子  
山本公之  
宮内敏  
竹村基

### ・現地参加者

京大関係者  
那須たみ子  
(見学懇親会)  
岩村哲  
(懇親会)



伊能図を直接撮らない条件で1枚のみ撮影



天理大学附属図書館

## 閲覧調査報告

この報告書は参加された方々から頂いた資料を基にまとめたものです。資料撮影禁止のため、画像付で報告出来ないのが残念です。（京大図は同図書館HPの貴重書画像で見られます）。

### ○京都大学所蔵資料

京都大学附属図書館では、中図2、小図7、合計9枚の伊能図稿本を閲覧しました。時間が限られていたため、十分な記録はとれませんでしたが、ひとまず簡単なメモを掲げます。

地図は折り畳み、袋に入れて保管されている。

袋の表・裏に下図のような墨書きがある。袋表書きには対州全図始め合計九葉の図名が書かれている。「四国淡州沿海地図」、「九州六箇国之内沿海図」は中図、その他は大図である。

袋裏書きには伊能三郎右衛門の親戚筋にあたる内田信氏の由緒書があつて、本図群の来歴の確かさを示している。

#### ① 袋書き(表)

5-84  
イ-1  
貴別

#### 一 対州全図

壱岐国図

四国淡州沿海地図

九州六箇国之内沿海図

大隅国 駄謨郡屋久島沿海図

全国 熊毛郡種子島沿海之図

肥前国 (平戸島・生属島・黒・大島・高島) 沿海之図

全 五島沿海上下式景之図

#### ② 対州全図

#### ② 対州全図

大図 (対馬部分)、稿本、232×101 cm サイズで折本。

裏打ちナシ、針穴アリ、径緯線ナシ、方位線ナシ、虫食いナシ、傷ナシ、地名朱字、村名村界郡界 (黒の極細) 上から朱で大きく重ね書きしたもの多い、文字は達筆、測線 細い

壱岐国図など他の図に比してやや粗の感あり、対馬北端近く、鰐浦、佐須浦に「朝鮮国渡海港」と朱で表記あり

縮尺参考：南端の神崎から北端まで約160 cm

(メジャーを直接あてる) とが出来ないので概略値)

この計測値から縮尺を算出すると、約  $1:45,150$  となる。大図とされており、表現方法は大図相当であるが、この図は縮小された特殊な縮尺である。

#### ③ 九州六箇国之内沿海図

中図 (九州第一次)、稿本、186×141 cm、折本、裏打ちナシ、針穴アリ、経緯線ナシ、方位線ナシ、方位図、接合子ナシ、虫食いナシ、傷ナシ、汚れアリ (二

#### 袋書き(裏)

ケ所) 読むに支障ナシ、文字は丁寧、色は対馬に同じ、接合子ナシ、境界ナシ

縮尺参考：大隅の先端から門司 150 cm

この値から概算した縮尺は約  $1:217,000$  で、

中図縮尺とほぼ一致する

#### (内田 印)

下総佐原伊能三郎衛門忠敬君

従祖父佐左衛門義制分與ヲ受ケ

我家二伝リ居

今尚親戚伊能源六

君拙宅ニ遊ビ其図ヲ相見、祖父忠敬

之分間縮図ニシテ大中小之三部之内

中絵図則是也ト確言ス以テ内田家

之秘藏トシテ世々相伝フ可キ物トス

内田順信 印

京都大学  
109 119  
図書

#### ④ 大隅国馴謨郡屋久島沿海図

大図 (屋久島) 経緯線ナシ、方位線ナシ、接合記号ナシ、極めて精緻 (描画壱岐に同じ)、中央に方位円記入アリ

縮尺参考：78 (東西) × 73 (南北) cm

算出縮尺 約  $1:35,897$

#### ⑤ 壱岐国図

大図 (壱岐)、88×82 cm、大図、折本、裏打ちナシ、針穴アリ、径緯線ナシ、方位線ナシ、方位円彩色ナシ、接合子ナシ、控え図か試作図ではないか?

村名赤、界黒、赤の点何?、全部塗りつぶし、字は達筆。村名は黒字細い、神社：鳥居図と神社名を書く、極めて精緻、絵がきれいで精密、崖の様子 (海岸海湾の岩などすべて写す)

縮尺参考：46 (東西) × 52 (南北) cm

算出縮尺 約  $1:34,615$

#### ⑥ 四国淡州沿海地図

中図 (四国及び淡路島) 稿本、下図  
134×172 cm、折本、裏打ちナシ、針穴アリ、中図な方に方位線、経緯線ナシ、虫・傷ナシ、合印すべてナシ、国名、郡名ナシ、

最終版の中図より地名は詳しい。測線 地名 黒、図の左に九州の遠望を描く。

#### ⑦ 肥前国松浦郡平戸領

大図 (平戸島、生属島、其外小島、黒島、大島、度

嶋）、下図か、169×119 cm 折本、針穴アリ、裏打ちナシ、方位線ナシ、経緯線ナシ、方位円未完○のみ、 図に切り張り箇所（平戸島南端および的山大島、修正部分をくりぬき、修正図を貼りこむ）アリ。 チエックと思われる朱の点が多数アリ 裏面墨書
自 調川村印 街道海辺巡りて 至江迎村字白岩印 附 平戸島、生原島、其外小島、黒島、大島、度島印
海付四 校合済（校合済は朱筆）
緑は青みをおびる。 紙 28×41 cm 縮尺参考：平戸島南端から
的山（アズチ）大島まで 114 cm 算出縮尺 約 1:35,526

⑧ 五島沿海上下式景之図 上 大図、稿本、172×95 cm 裏打ちナシ、針穴アリ、 方位線ナシ、経緯線ナシ、方位円未完、全部着色測線 部分を白く塗り残す。 壱岐と同じく地名小黒を大朱で訂正、チエック点アリ。 測線は崖下の砂浜を走る。領分名朱で大きく追加。 中通島東方の相島（現在の地図では相ノ島）に「當島本圖可省」との朱書あり。 裏面墨書（二か所）
○ 天理大学所蔵資料 天理大学附属天理図書館では「実測日本全図（伊能中図）」の写本、一セット十枚を閲覧しました。通常八枚で構成される中図ですが、このセットは「佐渡島」「対馬・五島」を別図とする十枚構成を特色としています。
⑩ 大隅国熊毛郡種子島沿海之図 157×78 cm 精緻、方位円未完○のみ、切り張り箇所アリ。 浜津脇に「止宿」の記述アリ、「測処」記述アリ（島間・国上浦田・国上村濱脇・川向村見松・由久村熊野）、合印は湊（記号の形は完成図と小異）、神社
② 第貳号（北海道西部） 測線アリ、方位線アリ、経緯線アリ、裏打ちアリ、虫食いアリ。全体的に、きれいな写、川の名多く記載 亀田半島は伊能図の形を残すが、ぼかしではなく輪郭線で描かれている。 渡島大島 放射のみ（到達点不記）の方位線アリ (東四分、東五分半、東九分、東拾分半)
③ □□号（東北、□は欠損） 虫食いアリ、測線アリ、方位線アリ、経緯線アリ、平地に点点の記載あり（平地を意味しているのか）他になし珍しい。 丁寧な描写、測量出来ていないところ多く現代の地図に比較して不正確。
④ 三号ノ附属（佐渡） 新潟の海岸一部と佐渡を描く。新潟海岸は地形のみで地名なし。通常の中図の構成では佐渡は③に含まれる。佐渡を別図にする方式はこのセットの特色の一つ。 佐渡は丁寧な写、虫食いアリ、方位線アリ、経緯線アリ、裏打ちアリ、鉛筆使用あとアリ。
⑤ 四号（関東） 虫食いアリ、経緯線アリ、裏打ちアリ。上端部に矢印・十字状の方位記号および尺度目盛アリ、山の表示

十枚ノ内」、およびそれぞれの国名は省略し、収録地名を付記した、以下同じ）（本図は北海道北部と記した「北」の脇に東と書き入れてある）  
針穴ナシ、測線アリ、方位線アリ、経緯線アリ、合印ナシ、裏打ちアリ、虫食いアリ。  
地名など丁寧。鉛筆使用のあとアリ、経緯線描画にコンパス使用のあとアリ（陸軍写図「アメリカ大図」に似ている）  
明治の写か。  
号数は裏面の墨書による（各図共通の「伊能中図写」）

① 第壹号（北海道東部）  
大図、稿本、117×161 cm 接合子ナシ、  
朱の測線細い。

描画形式「上」に同じ、全部着色「上」に同じ  
裏面墨書（二か所）

がやや単調。富士山方位線の一部（南西、北西部分）方位数値記載ナシ。

#### ⑥ 五号（中部・近畿）

三河あたり中心、虫食いアリ、裏打ちアリ、経緯線アリ、中度アリ、鉛筆使用あとアリ。丁寧な写

淀川デルタの河道、京都市内の川詳細（他の図も多分同等）

琵琶湖の文字注記：北東 → 南西

#### ⑦ 六号（中国・四国）

虫食いアリ、裏打ちアリ、経緯線アリ。

#### ⑧ 七号（九州北部）

長門周防、対馬、平戸島あるが壱岐が書かれていな

い。輪郭の青と測線の赤が重なつて見づらいところがある。虫食いアリ、経緯線アリ。

#### ⑨ 七号附属（対馬・五島）

壱岐も描く、虫食いアリ、方位線アリ、経緯線アリ。朝鮮半島に方位線、日本列島と大陸の位置関係を正確につなげて表現したのは伊能図がはじめて（星埜）九州本土、平戸島は輪郭線のみ。

#### ⑩ 八号（九州南部、種子島、屋久島）

虫食いひどい。経緯方位アリ、きれい、地名が少ない。

標本調査的に大隅半島南東岸（大寄・早寄間）の地名を記録、ペイレ中国と比較する。十二地名中、観音崎：観音岬、立崎：立神、島津加村：邊津加村、坂本村：上坂本村の異同あり。

両図書館のご厚意により、貴重な資料に集中的に接する充実した時間もつことができた。しかし、限られた時間、限られたスペース、また、旅行先のことであって、対照したい資料の持ち合わせもないため、個別の詳細な検討はできていないが、今後、精査を行う際の着眼の参考となるよう、上記の観察結果をまとめておこう。

京大図は来歴のたしかな伊能図の稿本で、中國と大図よりも、大図のうち「対馬図」は1:36,000の大縮尺ではなく、概算値であるが約1:45,000と縮小された図である。精粗は必ずしも均一ではないが、全体として精写図である。

大図各図と四国中國は最終成果としての「伊能図」にいたる経過を示す原稿図、まさしく稿本としての性格を示している。

切り張りによる丁寧な修正、校合済という朱書（裏面）、確認チェックと思われる朱点、村名の表記など、とくに地名表現について前半のメモを補足しておく。

伊能図では国、郡の境界と測線が交わる地点に、大図の場合は二つの国／郡名を並記、中國の場合は国を二重の長方形、郡を長方形の枠内に広域地名として表示し、国境、郡境は記号で示すが、この稿本群では記号はつかわず、境界部分は「界」としてその下に境界を接する二つの郡、村名などを並記する。別に正規の村名も記されるので、地図上の文字は完成図よりも多い。完成図との比較によつて確認してみたいところである。完成図では村の境界は示されていないが、この図群では村境まで「界」として表されているところが特色である。四国中國も類似の表現がなされている。また種子島などに「止宿」「測処」と記された場所があり、記号化への道筋を示している。

天理中図は天測地等の記号を欠くが、全体として最

終版中図の精細な写本である。複数の手で写されていみるとられる。書写年はわかつておらず、伝写の系統を含めての追究が必要であるが、経緯線の作図などに鉛筆が使われており、明治期の作業である可能性が高い。経緯線のうち経線の大部分は点線で表示されている。コンパスを用いた作図の痕跡などもあり、経緯線網作図に試行的なものがあつたのかもしれない。

京大図の場合は来歴も明らかで、地図の性格もわかりやすい。大図写本と照合することにより、伊能図作成の過程をより具体的知ることができるだろう。一方、完成図の写本である天理図について、未知の来歴を推定することはなかなかの難題である。ある程度の手がかりを得るには他の現存図との地名などの照合も必要であろう。ちなみに、琵琶湖の文字注記は本図では北東から南西方向に記されており、後に確認したところでは、東大、成田山所蔵図が同方向で、東博およびペイレ図はその逆である。⑩に記した地名の比較は、地名（集落等）の少ない部分のため標本として適当ではないかもしれないが、地名表記についても詳細な検討が必要なことを示しているといえよう。

注・神崎順一「天理図書館所蔵『大日本沿海輿地全図』中國」  
『地図』34(2) 1996



伊能家家紋  
違い鷹の羽

## 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二回

# 伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

【表中赤色文字は改訂増補部分】

十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	（1801）	享和元年五月	
（26）	（25）	（24）	（23）	（22）	（21）	（20）	（19）	（18）	（17）	（16）	（15）	（14）	（13）	（12）	（11）	（6）	（1801）	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	熱海村	静岡県熱海市	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	相模屋要右衛門	持病癒未快復。日金完山、十国五島眺望、測量を心掛	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	地図下書も少残	地図下書も少残	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	雨天逗留、下絵図認、江戸へ届状相認出す	雨天逗留、下絵図認、江戸へ届状相認出す	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	名主新左衛門	雨天逗留、下絵図認	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	名主古谷小八	名主新左衛門	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	名主八兵衛	名主新左衛門	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	八幡野村	網代村	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	大川村	和田村	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	白田村	稻取村	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	白浜村	須崎村	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	長田	白浜村長田	
午中太陽測定大浦灯明堂より所々測る。恒星測定	恒星測定	下地図認	下地図認															



十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十
(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	(0)	(-)	(-)	(-)	
小浜村	岩和田村	勝浦村	興津村	天津村	江見村	北朝夷村	滝口村	洲崎村	洲崎村	那古村	千葉県館山市	板東三十三番札所	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音	那古観音
いすみ市	御宿町	勝浦市	勝浦市	鴨川市	鴨川市	南房総市	南房総市	名主兼代官	名主十左衛門	福原庄兵衛	洲崎村より富士、大山、天城、大島等を測る	雨天逗留	富士大島等不見故に逗留	恒星測定											
	名主庄兵衛	名主孫左衛門	名主弥兵衛	真言宗清水山淨照寺	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	朝六ツ二・三分頃大地震。恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定
恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定
九一	九一	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二

相川町火の見前より洲崎弁天それより海辺測量

阿波候臣閑権治郎へ中方位盤、量程車、小方位盤を渡す

蝦夷御会所へ出立届を申入

浅草高橋先生へ御暇乞に行













伊豆七島図売約される

先覚者・伊能忠敬と伊能測量に関する大河ドラマの要望書

「大日本沿海輿地全図」測量直後作成  
3 伊能中図「伊豆七島図」原図  
文化12～13年成 1幅 ¥12,000,000  
149×47cm 僅か虫損 保存良 由來箱書。  
小田原より下田まで含む。幕府提出中図  
より地名詳細。針穴(写図作成)跡があ  
る所図。古文書調査。複数枚の測量図を  
複数枚の測量図を



4 蘭船図 1額 ¥250,000  
江戸中後期 長崎絵師筆 42.4×57.1cm  
広渡湖秀画「蘭船図」(長崎歴史文化博物館蔵)の構図に似ている。  
上質顔料、保存大体良。

伊能忠敬研究会は、「一九九五年香取市（當時佐原市主催）」で開催された「フランス伊能中岡の里帰り」の大成功をキッカケに組織され、これまで一七年間、伊能忠敬再発見活動を続けております。このたび香取市を中心に東金市、横芝光町、九十九里町が連携して、大河ドラマ推進協議会が発足し、要望書を提出することになりましたので、当研究会からも、ぜひお願いしたいと考え、要望書を提出します。よろしくお願ひ申し上げます。

御参考に、これまで私共が深く保つてきた各種伊能イベントの経過などをまとめたので御覧いただければ幸いです。また、ドラマの検討にあたり伊能忠敬と伊能測量の全貌を描いた文学作品が無いことが問題であります。取り上げて頂きたいテーマ五〇話を「稿本 新説・伊能測量物語（第一次草稿）」としてまとめたので御一覧をお願いします。

伊能忠敬研究会として大河ドラマを希望する狙いは次のとおりです  
一、伊能忠敬は、事業家として成功して隠居の後、一転して将来の日本  
七年間の努力により華麗・精密な伊能図を残しました。伊能のことは誰

一、伊能忠敬は、事業家として成功して隠居の後、一転して将来の日本のために地図作りを始め、七年間の努力により華麗・精密な伊能図を残しました。伊能のことは誰でも知っていますが、伊能図の現物を知る人はごく僅かです。これを一覧すると業績の凄さに感銘します。伊能図の現物と地図作りの現場風景を紹介し理解を深めたいと考えます。

現場風景を紹介し理解を深めたいと考えます。

二、伊能が作った地図は幕府上皇五〇年後の明治初年から本格的に使われ始め、明治期の国土の基本図は伊能図を利用して制作されました。並行して三角測量により一枚づつ更改されました。が、全ての置き換えが終わったのは昭和四年でした。上皇の百八年後まで利用されたのです。まさに国家百年の計を

三、地図作りを言い出したのは忠敬です。初め私財を投じて始められましたが、幕府に認められ、通達が出されて、沿道の諸侯、町村の多大な協力を得て達成された国家事業でした。沿道町村民の協力の実像をリアルに紹介したいと考えます。

四、輝かしい成果の反面に周辺女性との深い絆がありました。彼は次々に妻に先立たれ、生涯に四人の妻を娶りましたが、最初の妻ミチの婿であつたからこそ、伊能家当主として事業を成功させ、村政にも貢献できました。三人目の妻がお信であつたから、お信の父・桑原隆朝という謎の人物の献身的な奔走で、高橋至時にめぐりあい、伊能測量が実現したのです。

よく知られる隠宅の若い内妻お栄の身元は最近明らかになりましたが有能な助手でした。若いお栄を相手に観測演習をしていた忠敬を師匠の至時は、忠敬は幸せ者だと羨んでいます。

後半の伊能測量で忠敬の心の支えとなつたのは娘のお稻でした。一度勘当されましたが、詫びを入れ

見度進大な尹能則重の実景苗等と、支えに女生たちの動きを重ね今さらなつ、高帝男生ばかりでなく、

星埜由尚  
會印

日本放送協会 会長 松本正之 様

星林由尚

敬伊研能忠印

（日本国際地図学会会長）

# 「江戸の天文観測三部作」シリーズ三冊を読んで

大沼 晃

小生は、伊能忠敬に関する伝記など関連書籍を今までに数冊読んでいたが、会報第六一号四四頁の図書紹介の記事を見て、江戸時代の天文観測についてまつたく知識がないことに気付き、また先達者たちの業績を時系列的に知るため、先ず、「月のえくぼを見た男

麻田剛立」を、次に「星空に魅せられた男 間重富」、最後に「天と地を測つた男 伊能忠敬」の三冊を昨年五月に一気に読み破した。

三部作は、書評に小学校高学年以上の読者を対象とした学童向けの本ではあるが、大人が読んでも楽しめる本で、特にイラストや貴重な写真が多数収録されているので、歴史教科書にない親しみがあると書かれていたが、まったくその通りである。また、大人でも判読しにくい漢字の地名や人名などに「ルビ」を振つてあるので大いに助つた。さらに、巻末に和暦・西暦・満年齢・主な出来事などが一覧でできる年譜が掲載されているので、読みながら当時の様子や先達者たちの出会いの情景をイメージできるのが楽しい。三者の出会いを中心に以下のような感想などを記す。

麻田剛立は、江戸中期（將軍吉宗時代）の享保十九年（一七三四）豊後国杵築藩（現在の大分県杵築市）の藩士・綾部安正（儒学者）の四男として誕生。幼少の頃から父腕に抱かれるながら天体

定し、その動きから太陽が動いていることに気付き、天体に興味を深めていったらしい。当時、世間で言われるような神童とし利発で聰明な子供であったが、反面、天体観測に熱中するあまり、母からきつく禁止されるというエピソードもある大変ユニークな少年であつた。

長じて独学で天文学や医学を学び、二八歳の時（宝暦十二年）、暦（宝暦五年に施行の宝暦暦のこと）に載つていい日食を予報し、翌年十三年九月一日、前年の日食予測が的中し一気に名声を高めた。また、三四歳の時、藩主松平親貞の侍医となり江戸に行つたり、三六歳の時に藩主の腹痛をたつた一人で治療したなどで、周囲の嫉妬をかうようなこともあり、武家社会のわざらわしさを回避し、好きな学問を探究したいという願望が強まつたためか、



「月のえくぼを見た男 麻田剛立」

鹿毛敏夫著

関屋敏隆画

くもん出版

間重富は、宝暦六年（一七五六、将军家重時代）大阪の質屋「十一屋」を営む間重光の六男として生まれる。間家には「百足退治伝説」で有名な俵藤太（藤原北家・魚名の末裔、藤原秀郷のこと）の流れを汲む家柄であるとの言い伝えがあり、幼少の時から両親より学問はもとより、諸事全般にわたり

について何故何故問答をしたこと。早くも五歳ごとに気付き、天体に興味を深めていったらしい。当時、世間で言われるような神童とし利発で聰明な子供であったが、反面、天体観測に熱中するあまり、母からきつく禁止されるというエピソードもある大変ユニークな少年であつた。

たとのこと。早くも五歳ごとに気付き、天体に興味を深めていたらしい。当時、世間で言われるような神童とし利発で聰明な子供であったが、反面、天体観測に熱中するあまり、母からきつく禁止されるというエピソードもある大変ユニークな少年であつた。

ろ、庭に竹を立てて影を測定し、その動きから太陽が動いていることに気付き、天体に興味を深めていたらしい。当時、世間で言われるような神童とし利発で聰明な子供であったが、反面、天体観測に熱中するあまり、母からきつく禁止されるというエピソードもある大変ユニークな少年であつた。

たとのこと。早くも五歳ごとに気付き、天体に興味を深めていたらしい。当時、世間で言われるような神童とし利発で聰明な子供であったが、反面、天体観測に熱中するあまり、母からきつく禁止されるというエピソードもある大変ユニークな少年であつた。

へオランダ語を学ばせに行かせたり、三歳の時に江戸から大阪に遊学してきました。佐藤捨藏（一斎）の面倒を見たりした。短期間ではあつたが世話になつた捨藏は、後に大阪で見聞した天文学の最新情報を老中首座・松平定信（現在の総理大臣）に伝え、改暦の必要性を感じていた幕府は若年寄勝手方・堀田正敦を通して極秘にその意向を間重富の師である麻田剛立に打診をしたといわれる。そもそも暦作の権利は古くから京都の名門・土御門家や加茂家が世襲しており、幕府が一方的に作ることの難しさがあり、間重富はその難しさを知るが故に、事前に京都の陰陽頭土御門家に入門し、私財を投じながら改暦に関する情報を収集していたのである。また、改暦にあたつては麻田学派に白羽の矢が当たることも予期していたようで、幕府側と麻田派、朝廷側と麻田派の縁を取り持つ重要な役目をした人物なのである。

寛政七年三九歳の時、幕府から改暦の命令が下り、高橋至時と共に江戸に出向く。同年八月、押しかけ女房に近い強引な形で間重富より九歳年上の伊能忠敬が高橋至時のもとに入門してくる。伊能忠敬より年若であるが商売人であり苦労人でもある間重富は、天体観測を指導しながら傍らで見ていた伊能忠敬の人物像を精力的な弟子と表現しているが、反面、自信過剰・尊大・謙虚さに欠けると評した。そう評された性格が後年糸魚川事件

など引き起こす遠因になつたかもしない。

町人の間と新参者の高橋らは、権威をひけらかす幕府天文方の吉田や山路の反感を克服し、またそれぞれ身内の不幸に見舞われながら困難を乗り越え、改暦御用に精進した。寛政八年八月、正式に改暦御用が天文方の高橋らに命じられ、吉田・山路らと共に京都へ出向き、西三条台に改暦御用所を設置し、陰陽頭土御門家と交渉に入る。

多分、高橋至時が出発する前に土御門家の門人としてどのように折衝したらよいか、いろいろと個人的に伝授したのではないか。町人である間重富には幕府や朝廷という大きな壁があり、前面に出ることはかなわないことであつただろう。その間、間重富は江戸の留守を預かり伊能忠敬の面倒を見た。努力の甲斐があり約一年後の寛政九年十月、光格天皇より改暦の宣下があり、暦号を「寛政暦」と賜る。翌十年より施行と決まる。幕府は、その努力を表して江戸城躰躰の間で高橋らに金子が下賜された。しかし、間重富は町人であるため町奉行所から銀子二十分と大阪に屋敷（天神橋三百坪）を貰うという榮誉に浴した。そればかりではなく苗字の間を名乗ることを許され、寛政十年一月に大阪にて天文御用（五人扶持）を命じられ、高橋至時と別れの挨拶を交わし大阪へ戻る。翌十一年、師の麻田剛立が亡くなり（六十五歳）

間重富らが手厚く葬る。

文化元年四八歳の時、高橋至時が浅

幕府から至時の長男景保の後見人を命じられたり、文化三年には仙台藩の漂流民がもたらしたロシア製の世界図などの翻訳を若年寄・堀田正敦（仙台藩主伊達周宗の後見人でもあつたためか）から依頼を受けたり、大黒屋光太夫がもたらした原図を元に、景保の「魯西亞新都ペテルブルク之図」作製に協力した。

文化十三年（一八一六）、六十歳の伊能忠敬の業績は世に知られているが、生涯を閉じる。息子の重新が父の天文御用を引き継ぐ。最後に、麻田剛立や伊能忠敬の業績は世に知られているが、地味な間重富は二者と比べても決して見劣りしない業績を上げていることを強調しておきたい。



「天と地を測った男 伊能忠敬」

岡崎ひでたか著 高田勲画

くもん出版

一方、伊能忠敬は寛政十二年から奥州街道や蝦夷地へ測量に出かけ、次々と輝かしい実績を重ねて行く。

文化元年、九年間にわたり苦楽を共にした師の高橋至時とのつらい別れを体験する。その後に幕臣に取り立てられ、以後測量事業は幕府の御用となる。「大日本沿海輿地全図」など作成を続けるが体力が衰え、文政元年（一八一八）永遠の眠りにつく。

三年後の文政四年、合計二二五枚に及ぶ「大日本沿海輿地全図」が完成し、高橋景保が伊能忠敬の嫡孫忠誨を伴い幕府に上呈し、この事業は終結する。

「星空に魅せられた男 間重富」  
鳴海風著 高山ケンタ画  
くもん出版

（注）編集部で若干、加筆修正した。

## 忠敬談話室



番目でも駄目なんですが、もし一番なら、もう当然匂いがしてきますから、一番ではないですね。しかし、一〇番以内には入ったのでは、という予感です。

○イノペデイアで山島方位記の撮影と、DVD出版をすることにしました。八月に撮影を致します。

詳細はこれからですが、記念館の内諾をいただきました。あまり詳しく書くと新聞発表できないので、ここまでになります。全六七冊、一冊の平均は五〇枚から六〇枚です。

○大河推進協議会にたのまれて「伊能忠敬と五人の女性たち」について佐原で講演をしました。全く不得意の分野なので、メモを作つて読み上げ、私見をくわえただけなのですが、話しながら思い付きました。

大河に登場させたい女性と、活躍の舞台を考えて、これを次号あたりから二回ほど会報に掲載し、NHKの局長以下の関係者に参考として送りつけるのは名案ではないかと、思案中です。

○最近嫁入り先がきまつた大谷亮吉旧蔵「伊豆七島図」の話です。会員の前田幸子さんに聞いた話ですが、約四年前に取材のため大谷家を訪問したときは同家にはもう無かつたそうです。

出品書店の話では、最近入手したように言つていましたが、そういうことだと複数の古書店が介在したことになります。わからないですね。

○再来年の大河ドラマ番組は、この会報がお手元に渡るころには決定していると思います（外部にアナウンスされるかどうかは別として）が、私のドタ感では「伊能忠敬」は候補には入ったのではないか、という気がします。

候補は一〇個くらい挙がるので、一番でないと、二



（渡辺一郎）



会員で「伊能忠敬」NHK大河ドラマ化を目指す推進協議会の  
木内信次さん（香取市）からメッセージ

「伊能忠敬」大河ドラマ化に  
研究会のご協力をいただき  
ありがとうございます。

翁の生き方を現代の教訓として  
子供＝目的を持ち勉強

大人＝家業に全力、そして人助け  
老人＝子供の時からの目的を達成

そして社会奉仕

現在

子供＝目的が無い＝親が定める、  
大人＝自分の利益

老人＝天下り

全て教育が元点である。

暖かい社会を作ろう。

翁の生き方を現社会の鏡にしたい  
（大河ドラマ）です

研究会の一層のご協力を  
お願いいたします。

## 総会報告

六月十日（日）、東京・江東区深川の富岡八幡宮で、伊能忠敬研究会、二〇一二年（平成二十四年）度総会を開催しました。

りました。今後検討いたします。

終了後の懇親会にもほぼ全員が参加、初参加の新入会員、遠来の会員などのひとこと発言などで、盛り上がり、五時過ぎに散会しました。

北海道、青森、石川、兵庫、福岡、佐賀の各道県を含む各地からの参加者は四〇名（委任状九〇通）、高安克巳理事の司会のもと、星埜由尚代表理事の挨拶、つづいて議長に木内志郎会員を選出し、鈴木純子事務局長による前年度の経過、収支決算報告、二〇一二年度事業計画、年度予算の説明、清水靖夫監事による監査報告があり、経過・決算及び監査、事業計画及び予算案がそれぞれ承認されました。

フロア展の進捗と大河ドラマの要望書提出については、渡辺一郎名誉代表より報告がありました。出席者から、とくに遠距離からの参加の場合、総会開催日は日曜日でなく土曜日のほうが好都合という発言があ

りました。今後検討いたします。  
砂降り、しばし屋内にとどまつてやり過ごしたことでした。有志はさらに二  
次会へ。  
今年、参加出来なかつた方々、来年  
はぜひご参加下さい。



2012.06.10

# 新入会員自己紹介



山根伸洋（のぶひろ）さん（福生市）

【交通史学会会員】明治初年代以降のインフラ整備事業の過程における地図の作成プロセスなどを調べております。近代の地図の淵源に伊能図が横たわっていることは常に意識しておりました。が、やはり正面から向き合ってみたいと思い、河島さまにご紹介を依頼した次第です。（以上入会案内を送付した際の返信より抜粋）

鈴川準二さん（東京都港区）

昭和十九年、山口県生まれです。伊能大図の中でも傑作といわれる毛利大図の「岩国」には、岩国城下の西十五キロに「玖珂村」とあります。そこが私の生地です。

十八歳までここで過ごしました。大学時代は石田龍二郎先生の門下生でした。が、就職してから四十年間は地理学とは無関係の仕事でした。わずかに趣味を通じて、地図と時刻表を生涯の親友として付き合つた程度です。

平成二十年に引退してからは、ボランティアとして、ムリンディ・ジャパン・ワントラブ・プロジェクトの日本事務所代表代行をしています。

これはアフリカのルワンダとブルンジで障害者のための義足を提供する事業です。現地で義足を説明、また技術を伝えるのが主体ですが、資金源は日本個人寄付金で、その名簿管理と会

計帳簿を担当しています。

新入生の伊能忠敬研究会でも、私に出来る範囲の仕事でお手伝いしたいと思つております。どうぞよろしくお願ひします。

鈴木宣美（よしみ）さん（八王子市）

（三十七歳）



平山一族研究会発起人・日本家系図学会会員・経営コンサルタント会社㈱バイタルネットワーク役員。

母方（日色）家】先祖（千葉県出身）と武藏七党西党・平山季重（ヒラヤマスエシゲ・鎌倉幕府将軍源氏三代に仕え、源平合戦における平家打倒の勇将・武藏国日野の豪族（現京王線「平山城址公園」駅付近で栄えた）末裔の豪族・下総国多古平山氏と姻戚関係有。

（連絡先）

y-suzuki@kdb.biglobe.ne.jp

平山一族研究会入会事務局まで。

島田泰枝さん（千葉県銚子市）

この度、伊能忠敬研究会に入会することになりました。

先日、銚子ジオパーク推進市民の会

による現地研修会があり、会の代表で

（一言）  
偶然、私が資料館を訪れた時、研究

究が始まり、平山十五家系考察・研究活動に邁進。のちに多古平山本家と伊能忠敬の銚子測量の話を聞き、宮内先生を紹介していただきました。

伊能忠敬研究会員の工藤先生から、伊能忠敬の銚子測量の話を聞き、宮内先生を紹介していただきました。

後日、両先生が見えて伊能研究会の説明を受けました。この地から富士山の方位測量がなされたことを知りましたが、地元でもその事を知つてゐる人が殆どないと思います。

さて、私ごとですが、九年前逝去了夫が日頃、『我が家が現在商売できるのは町の人々のお陰』と云つてゐた歴史好きの主人の遺志を汲んで『外川ミニ郷土資料館』を平成十九年三月一八日、無料開館しました。

これは銚子電鉄の経営危機を支援しきれられる最重要研究課題と認識する一方、将来の「平山一族研究会」と「伊能忠敬研究会」の交流が実現できればという思いから入会を希望致しました。

伊能忠敬研究会会員の皆様方におかれましては、並行して、当「平山一族研究会」にご入会いただきたく存じます。ご入会希望の方は是非ご一報下さい。

（連絡先）

島田泰枝さん（千葉県銚子市）

この度、伊能忠敬研究会に入会することになりました。

先日、銚子ジオパーク推進市民の会

（一言）  
偶然、私が資料館を訪れた時、研究

## 展示品

漁具（魚網、網針、メンバ、浮球他）  
漁師の晴れ着「万祝（まいわい）」  
貝、石の標本  
地域の歴史、民話、方言等の資料、絵葉書や記念切符など。

市民のボランティアによる出前講座も好評です。

（一言）  
偶然、私が資料館を訪れた時、研究



調査の為、来館されていた千葉大学生と引率の先生を前に、島田泰枝館長さんは地域・銚子外川の事を熱く語つていらっしゃいました。観光客だけでなく、博物館関係者や、大学生等研究目的の方、地元小中学生の来館者が多いようです。詳細は「外川ミニ郷土資料館」HPをご覧ください。

(宮内記)

<http://www.tokawa.jp/>

いらっしやいました。観光客だけでなく、博物館関係者や、大学生等研究目的の方、地元小中学生の来館者が多いようです。詳細は「外川ミニ郷土資料館」HPをご覧ください。



## 会員便り

総会返信などより

### 会誌第六四号の地名標記について

中塚徹朗さんより

いつも、会報をご送付くださりありがとうございます。

今回も楽しみにして居りました。

「伊能忠敬研究」二〇一二年第六四号が届き、「伊能図の旅」をはじめ冊子

の内容の充実に感動しました。

さて、資料「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第一回も貴重な御仕事

とありがたく感謝申し上げます。

ただ、左記の地名標記が気になります。

したので御確認頂ければ幸いです。

(記)

四五頁 寛政一二年九月十六日の欄  
？ 中食 一ノ瀬  
↓ 中食 一ノ渡

〔編集部より〕

ご指摘のとおりです。間宮林藏関連の有名な地名の校正済れで、大変恐縮です。お詫びして訂正いたします。ありがとうございました。

村上 昭三さん(船橋市)

体調不良が続き会合に出席出来なく、残念に思っています。会報はいつも楽しく読ませてもらっています。

田野 圭子さん(千葉市)

一年もかかった家のリノベイトがようやく終わりそうです。

大西 道一さん(神戸市)  
地図をあつかう雑誌は大きいほどよいと思います。

三木 敏明さん(姫路市)

「忠敬日記」の内、兵庫県通過八回分解読パソコン入力しました。入用でしたらメールで送ります。

及川 敏男さん(香取市)

友人五人と忠敬ゆかりのウォーキングを年一~二回やっています。先日は八丁堀亀島町の地図御用所跡(忠敬終焉の地)を訪ねました。

秋間 実さん(逗子市)

年男(八四歳)なんとか生きのびてあります。総会がいまからたのしみです。

安川 義巳さん(旭川市)

新版の会報、より立派になりました。各地の伊能関連史跡の紹介、ありがたく思っています。後世に受け継がれ、かつ、後継する技術者への啓発となることを願っています。コツコツと働く人達が、もう少し、高く評価される時代がきてほしいものです。

石川 清一さん(福岡市)

昨年から福岡市の公民館長になり、勤務して今までより自由な時間がなくなりました。年間三万人近い利用者がおり、緊張しながら出会いを楽しんでいます。

山本 公之さん(小平市)

旅先へは伊能図が何よりの懐ぶよすがとなる。先日能登は仲代達矢の芝居を七尾市中島町にある演劇堂に行く。

(三) 天測を希望し宿泊した中島村に

ある。帰京し改めて興味深く読み、力作と感謝する。

高宮 宏さん(東金市)

六四号の忠敬旧宅雑録(二)興味深く読ませていただきました。特に、祖母孝様の見学者への五十年にわたる無償の奉仕に、重要文化財を守つてきた伊能家の御苦労が偲ばれ、感銘いたしました。伊能洋様のさりげない文章も心にしみました。

河西 浩さん(甲府市)

黄金ウイークに佐原の一蘭荘さんのお世話になって記念館や小野川周辺を散策する予定です。前に雪で断念したのでゆつたり楽しみたいと思います。

伊能 二三代さん(札幌市)

大河ドラマ実現、願っています。小さな小さな力になれて、うれしいです。

石田 定雄さん(旭市)

行事等にあまり参加できず、申し訳ありません。今後ともよろしく。

石橋 輝樹さん(新潟市)

佐藤嘉尚氏の「伊能忠敬を歩いた」を楽しんでおります。

石嶋 博行さん(銚子市)

会誌を拝読していますが、カラー版となりびっくりしています。

伊能隆男さん(浦安市)

東日本大震災で液状化被害により被災し、街の自治会長として復旧と液状化再発防止に取り組んで参りました一年でした。

成家淑子さん(香取市)

完全復元伊能大図展(香取市民体育館)に渡辺名誉代表、星埜代表理事、

伊能洋・亮氏、鈴木事務局長（敬称略）、会員多数参加していただきありがとうございました。会場地として成功裏に終了できました。この大図展を機に地域の教育文化の発展に寄与できるよう努力したいと思います。



馬場良平さん（武雄市）

「完全復元伊能図全国巡回フロア展」佐賀開催が決まり、いよいよ忙しくなりそうです。今年は当地伊能測量200年

の節目の年でもあり、私の「塚崎・唐津往還を歩く会」では伊能忠敬測量隊の足跡をたどる歩く会を開催します。

山本公之さん（小平市）  
坂本巍さん（藤沢市）  
この間は、天理大、京大と大変貴重な体験をいたしました。次なる楽しみ励みとなるものを願つております。

測量日記のワード化（ホームページ化）の作業を継続して行なっています。私の担当分は七次測量までで、すでに終わっているのですが、現在八次、九次測量分を実施しています。

小林順三さん（相模原市）

正月に心筋梗塞を手術致しまして現在は何とか元の状態にもどつております。小説『長明さんにお会いに行く』が完成、六月末に書店に並ぶ予定です。

新宿「紀伊国屋」、「三省堂」など、300店配本の予定となつております。

城野幹丈さん（嬉野市）

昨年は入会させていただきありがとうございました。始めての総会出席、ようしくお願ひ致します。富岡八幡は学生時代、仲間と音楽の練習を近くでやつていたので、とてもなつかしいです。

堀野正勝さん（土浦市）

「完全復元伊能図全国巡回フロア展」の全国催行を目指し、頑張っています。今年は、佐賀、呉、岡山を予定しています。

海保英之さん（千葉県横芝光町）

長らくご無沙汰致しまして、申訳ございませんでした。体調も良くなつて参りましたので、また、お仲間に加えて頂きたいたいと思います。よろしくお願ひ致します。

矢能 彰さん（さいたま市）

足を踏みはずして、接骨院通い。この二週間余り、サンダルで杖突き歩行です。総会までには健康を取り戻したく、日々努めます。

座間喜美さん（東京都中野区）

出席できたらどんなに幸せに存じますが少し脚が不如意にてご盛会をお祈りしております。大変読み易くなり、次の号が待たれます。知り合いの方にもおすすめしています。

西川治さん（多摩市）

丑年生まれ、米寿が近付き、余命がいよいよ短くなりました。“うし”と見世ぞ…。皆さまのご活躍に期待しています。

久保木恒雄さん（柏市）

私、元気。

高宮 宏さん（東金市）

伊能忠敬の足跡が残る倉吉と八橋を結ぶ八橋往来、国の夢街道モデル地区にも認定されている道を歩いてみたいと計画しています。

直江泰子さん（筑西市）

欠席で失礼します。ご盛会をお祈りいたします。震災後、最近の竜巻の被害と、近くですので思い一人でございります。

松尾卓次さん（島原市）

今秋、伊能忠敬島原地方測量200年、伊能図展＆講演会開催予定です。

伊藤栄子さん（練馬区）

脊柱管狭窄症のため遠方まで歩けなくなりました。失礼させて頂きます。御盛会を祈念いたしております。

塚本倫正さん（成田市）

いつも立派な機関誌ありがとうございます。佐原の地図展好評でした。

河西 浩さん（甲府市）

四月二九日に佐原に寄りました。伊能旧宅の被災の様子に驚きました。小野川沿いを歩いていると山車の人形を製作している方に話しかられ、三・

一の被害の様子を聞くにつれ、大きな地震だったことを感じました。妻と娘で一蘭荘で一泊し、東薫の葉を味わいました。忠敬さんで町を盛り上げようとする意気込みを感じました。

大内惣之丞さん（習志野市）

益々の御発展をお祝い申し上げます。北見市に行つて居りますので欠席させていただきます。

松田昭二さん（京丹後市）

老齢にて出席ができません。盛会をすよう祈念しております。

川上 清さん（水戸市）

☆この日私が会長を務める水戸歩く

会及び偕楽園公園を愛する市民の会、映画桜田門外の変支援の会との三者共催で『緑したたる偕楽園ウォーク』を開きます。残念ですが欠席です。

平川定美さん（佐世保市）

「伊能忠敬記念碑建立にむけて奔走中」は文化十年一月四日（一八一三・一・四）から始めて約二週間滞在して測量しています。来年の一月四日（開始）が二百年になりますので、懸命に土地を物色しています。

伊能忠敬全国測量第八次測量九州第二

次で、佐世保市相裏□□を測量したのは

川上 清さん（水戸市）

☆通常上記水戸歩く会の月例会開催に努め月3回（第1日曜日と適宜な平日2回）が市民にも滲透してきました。

宮地 滋さん（伊万里市）

近頃は、加年の為すこし体調をくずしていませんので、総会に出席したいのですが残念です。総会の盛会をお祈りいたします。九州支部例会はぜひ出席して御報告を賜りたいと思つております。支部会を楽しみにしております。



敬大河ドラマ化を期待しております。

中尾 弘さん（草津市）

いつもありがとうございます。残念ですが今回も勝手ながらよろしくお願ひいたします。

増田健之助さん（匝瑳市）

ご無沙汰しておりますが、元気に毎日を過ごしております。これからもよろしくお願ひいたします。

川口富太郎さん（香取市）

五月二日 香取市民体育館における「完全復元伊能大図展」に行ってきました。

野田茂生さん（大野城市）

とりあえず元気です。

中塚徹郎さん（北海道福島町）

第一次測量蝦夷地上陸地点の町福島

前回は佐原で皆さんにお目にかかりて嬉しいでしたが、今年は残念ながら出席できませんのでお許し下さい。先年北海道「別海」で記念碑は申請してから、許可まで二年かかるので、とりあえず記念柱にしておくという事でした。が碑は何時立ちますか。海は船としても二本の足で歩いて日本全国の地図！ただただ頭が下がります。見習つて私もがんばります。また、北海道行きたいです。

石川清一さん（福岡市）

昨年4月に就任した福岡市公民館長の所用と重なり、誠に申し訳ありませんが欠席いたしました。次回は是非参加したいと思います。

神保 誠さん（千葉県横芝光町）

出席できませんで申し訳ありません。御成功をお祈りしております。忠

安川義巳さん（旭川市）

伊能忠敬が広く知られる機会の多くなった事を喜ばしく思っています。会報の発行等をはじめ、役員の皆様にはご苦労をおかけしますが、今後共宜しくお願い致します。北海道の今冬は豪雪となりましたが、四月下旬の猛暑で一気に雪が解け、桜も開花と同時に満開宣言とあわただしい春です。でも、本日は一転して降雪の地もあります。

リラ野花が咲く前に「リラ冷え」となっています。ことしの春はあつと云う間に終つて、急に夏になるかも：と、

体調を心配しています。ご盛会をお祈りします。

本日は一転して降雪の地もあります。

雪となりましたが、四月下旬の猛暑で一気に雪が解け、桜も開花と同時に満開宣言とあわただしい春です。でも、本日は一転して降雪の地もあります。

リラ野花が咲く前に「リラ冷え」となっています。ことしの春はあつと云う間に終つて、急に夏になるかも：と、

体調を心配しています。ご盛会をお祈りします。

本日は一転して降雪の地もあります。

雪となりましたが、四月下旬の猛暑で一気に雪が解け、桜も開花と同時に満開宣言とあわただしい春です。でも、本日は一転して降雪の地もあります。

し、職人の出入りも途絶えました。今後は、後始末に専念致すつもりです。

伊能忠敬研究会2012年度総会のお知らせありがとうございます。加齢の上、風邪を引いて出席叶いませんので済みませんがよろしくお願ひします。御盛会をお祈ります。



## 会報に関するアンケート調査結果のお知らせ

### 会報編集部

大項目別に、ご意見の概要と、編集部の対応、投稿者へのお願いを以下に記します。

今回伊能忠敬研究会会報に関するアンケート調査を一〇名の方々にお願いし、七三名の方から御回答を頂きました。

御意見を寄せられた皆様、ありがとうございました。

今後の会報編集の参考にさせていただきます。

一、質問1～3で悪いと答えた方々の意見は主に次のようなものでした。

◎B5版で揃えておいて欲しかった。

◎一五年記念特集号は、記念特集だから意味があるが普通の会誌は大判になると扱いにくい。分厚い美術全集などは大判ですが昔から小説は大判でなく何巻あってもうまくきつちり本棚に並べられます。忠敬研究会の会報は（会誌）それほど分厚くないし今迄のものが扱いやすいし、本棚にもきちんと立てておけます。

◎今迄長らくB5であったものを、サイズを変更すると保存に困る。本棚はB5基準なので別の場所となる。サイズは守って頂きたい。



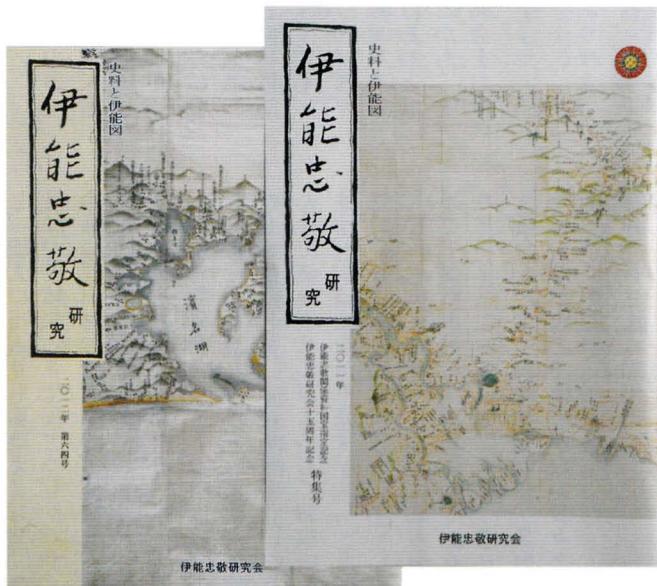
創刊第7（1996年）から第61号（2011年）伊能忠敬研究会誌  
モノクロB5版縦

内容についてのクレームは一件で、サイズ変更は具合が悪いというものが殆どでした。A4かB5かについては、編集部でも散々迷ったところです。

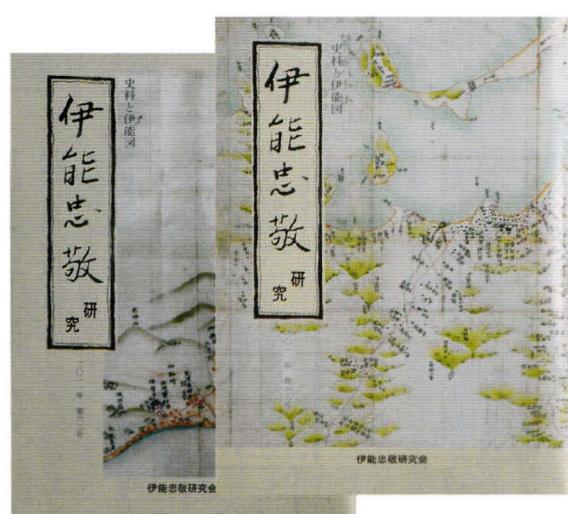
会誌のA4化は時の流れですし、費用は全く同じです。A4の掲載スペースは断然大きくて経済メリツトがあります。

特にカラーにする以上、地図・写真を鮮明に扱いたいと思います。地図の場合は、大きさは大きいに物をいいます。

反対意見は思ったより少なくて、かつ理由は主に不揃いということのようです。御理解をお願いします。



特集号（右）と第64号（左）  
カラー化、A4版



第62号と63号  
カラー化 B5版

## 二、掲載内容についてのご希望の主なものは次のとおりでした。

- (二) 充実した内容ですので、特に申しあげることはあります。
- (二) 伊能忠敬の人物像に関する話題もせて欲しい。
- (三) 伊能忠敬の入門記事も掲載して欲しい。
- (四) 地方のニュースを重視してほしい。
- (五) 伊能忠敬関連人物も取り上げて欲しい。
- (六) 伊能忠敬記念碑に関する記事を希望する。
- (七) ブロック毎の話題や研究内容の掲載を希望する。
- (八) 息抜きになる記事も載せて欲しい。
- 類似の希望を整理すると、このくらいになります。
- 伊能関連の全てを網羅せよ、といつてはいるよう
- に感じます。地図の希望が余りないのは、すでに充
- 分掲載されているからでしょうか。
- 編集の立場で考えますと、会員さんの層はつぎの
- ようにわかるかと思います。
- ◎読者系の方々（執筆するお気持ちは無くて、記事を読んで、何等かの参考にしたいとお考えの方々）
- ◎勉強系の方々（記事も読むが、ご自身でも調査研究し発表をされる方々）
- ◎イベント系の方々（忠敬イベントに興味があつて参考として目をとおされる方々）
- ◎応援団系（伊能忠敬普及活動の応援をするために会員となつておられる方々。大変ありがたい会員さんです。結構多いです）
- これら全ての会員さんご満足いただくのは至難であります。予め謝つておきます。
- それでは会報に何を載せようとしているのか、と
- いわれそうですので、カラー化後の編集部の考え方を整理しておきます。
- 1 カラー画面を生かしたい。わかり易くいえば、地図と写真を鮮明に紹介したい（写真、地図は少なくとも三五〇DPI以上の画像で投稿をお願いします。）

2 学会誌ではないので、平易な表現をお願いしますが、なるべく将来にも残る記事を載せたいと思つてあります。

いい記事を書いていただいた小島一仁、佐久間達夫、安藤由紀子、伊能陽子さんなどが故人になつてしまつたのは大変残念です。

したが、これらはあくまで、伊能側の史料であつて、大名家や地元には文書化された大量の伊能隊応援記録が残っています。これらは伊能測量一件記録としては一体をなすものと考えます。

次世代に間違なく伝えるために、代表的な文書をなるべく取り上げたいと考えています。原史料の提供をお願いします。量が膨大なのが悩みの種です。

4 会員希望ならびに編集方針に沿つて、ぜひ投稿をお願いします。小さなテーマでも結構です。調べてお書きください。伊能本は結構多いので、適当に作られた本の孫引きや、丸写しは御遠慮願います。

5 新しい発見とか、新規の史料紹介は、どうしても読みにくいと思います。しかし、伊能忠敬に関する知見を広めるためにはぜひ必要です。

### 三、会報に関する一般的な感想

◎高安さんの手腕に感服しています。

◎いつも楽しみにしております。素晴らしい資料として孫にも伝えます。

◎カラー化、A4判化ありがとうございます。とても見やすくなりました。

◎巻頭の伊能図は迫力がある。

◎新事実が次々分かつて驚きます。

◎伊能図と現代地形図をならべた「伊能図の旅」はたいへんおもしろいと思います。

◎文字及び写真（挿絵など）が鮮明になり見やすくなりました。

◎頁数はこれ以上増やさずとも今後も年4回の定期刊行を定着させて頂きたい

◎むずかしい言葉には説明つけてもらうとありがたい。

この辺はすべて、有難いお言葉です。編集部にどうにしています。伊能ニュースについて、我々は発信元そのものであつて、いつも早い機会から承知しています。

ただ、情報源ゆえに、発表に先立つて掲載は出来ません。なるべく早い機会に、少し詳しく、と心がけていることを御承知下さい。

会員便りは、なるべく、そのまま載せるよう心がけています。あの記事はよかつたとか、こういう点をもう少し突っ込んでとか、会報記事その他について具体的な感想を歓迎します。

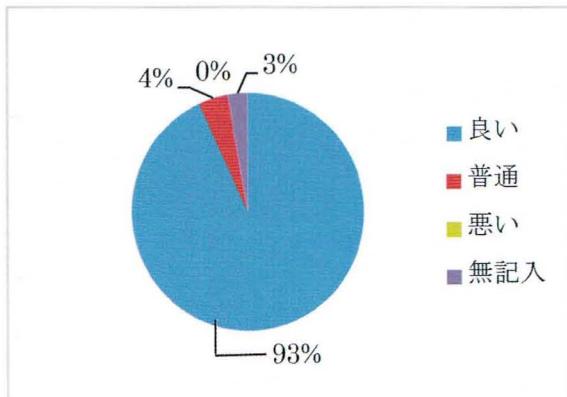
8 第二項の掲載希望に戻りますが、ボールの投げ返しだけではいけませんので、入門記事掲載あるいは疑問点解決の対策として、Q&A頁を創設したいと思います。

詳しいことは無理ですが、具体的な質問をお寄せ下さい。一問を一頁以内で説明するような形で試みてみたいと考えます。

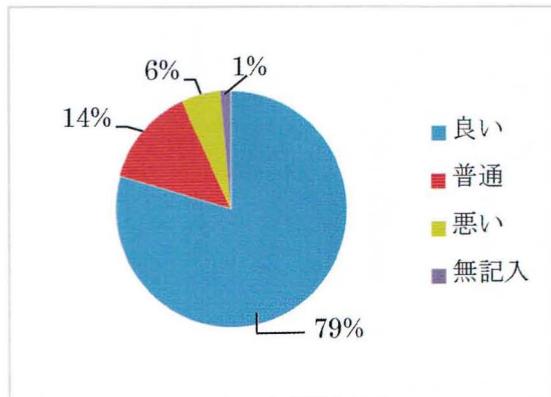
（渡辺一郎、高宮勲記）

## 質問項目別回答状況

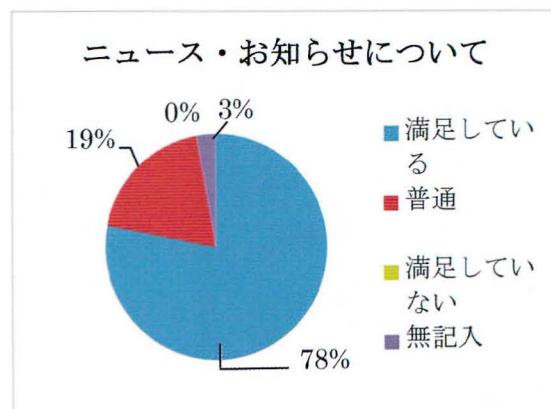
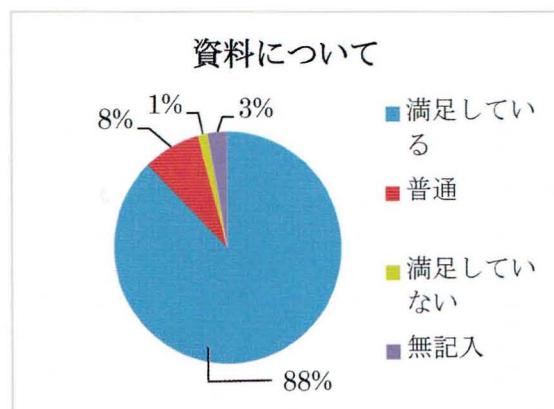
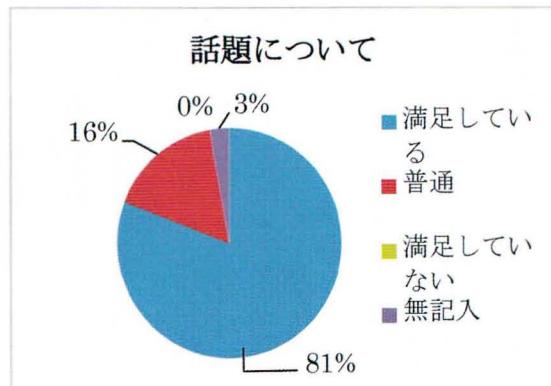
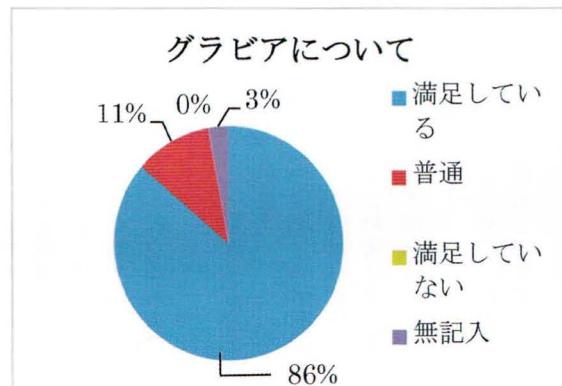
<質問1> カラー化変更については如何ですか



<質問2> A4判化変更については如何ですか



<質問3> 掲載内容については如何ですか



アンケートにご協力頂き ありがとうございました

## 『伊能忠敬研究』投稿要領

伊能忠敬研究会御案内

## ①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり

六頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2400字(600字×四段)です。長い原稿の場合は連載として分割してくださいともあります。

## ②原稿のかたち

本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロ

・**写真** 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットで作成された電子ファイルとします。

トされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意しておき下さい。

\*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、IMB前後のファイルになります。通  
用意してください。

常のデジタルカメラによって~~は~~モード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カ

メラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。

・図  
写真に準じます。原図を「ピ」にする場合は、なるべくスキャナで撮った電子  
写真に撮影する場合は、1/2 (127mm×89mm) 程度はプリントアウトした鮮明な写真でも結構です

ファイルにしてください。カラー数の少ない図はGIF形式のフォーマットでもかまい

③ 高の毛リ  
ません。

③原稿の送り方  
左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください

ださい。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文

中に編集者がわかる形で記入しておいてください。

送り先

・電子メール添付の郵便 inohken\_kaiishi@koalanet.ne.jp

郵送の場合は  
H-153-0042 東京都墨田区青葉台4-1-6日本地図センター2階

④ 注意事項  
伊能忠敬研究会 伊能忠敬研究 編集部

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください

・ 図や写真の引用について  
必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください

アリ。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または喝戻を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつ

ておいてください。

編集後記

- 三、入会方法等　入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバツクナンバーをお送りします。

四、事務局所在地  
〒153-0042  
東京都墨田区青葉台4-9-6  
日本地図センター2F  
伊能忠敬研究会  
電話・FAX 03-3460-0752  
事務局メール inohken@ae.auone-net.jp  
郵便振替口座 00140-0418410

伊能忠敬研究会関係ホームページ  
○「InoPedia (イノペディア)」伊能忠敬と伊能図の大事典  
<http://www.inopedia.jp/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料  
<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料  
<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>